隨見見物 十二

近世畸人傳
閑散餘稿抄
深平生衰記抄

イ 5
448
13

近世畸人傳

抄錄

乾

門 イ 5
號 448
卷 13

近世畸人傳抄錄

題言

前略 志とかくことよく少しせは小無紙とりてみ尋
乃作ともいひなせるあるも
高明生なの人を世に推ふもとまるべく人乃一生を植
紙ぬほかて浮宮むへあれはし 下略
伝名語ひは大りに乃家よみの物人なるにはさうひてい
ましへか已しはれは契沖あきわ和字正濫を著し
てつたるに例紙挙らる今物のまゝそこに当に
えしひとろ紙いたく梅は今のうなむのなれはあれうか
めに者なるへくも見ゆるに式といふ古今集の家を見て
これは物の名なるまは事あてかく用しましといふ事
をへてむりし紙志るに人て萬葉集乃文字伝学

この雁高樹字茂和と称し出雲似和名類聚も字鏡やうに
訓義をもれなく古書に仮名遣十七事記日本紀よ
り延喜式続紀 和名抄なと久しき世の事とこの雁
いとし 此乃新撰字鏡のことを古書に霊異記等 伝れハかのまにハ古書に書きいれ
仮名遣きくハいとも便にされば用て今よりのちの事に
あるへしの初しもつらねハ尽きて以下
下略
天保八戊申年夏五月
樹田子蕭斎自述

畸人伝

中江藤樹 附蕃山氏

上略 又医書の著述ハ其の業をいとひてなほいはれて理趣推て
明らかに在るものありし 医筌古今大全を佐とハ更に鳥の
人乃書あまた著すかし 中略 小医南針 神方奇術等ハ山岡
森村両医生のしるす著書なりと 中略 熊沢氏 後千蕃
山とも称せしハ備前侯にして其領地寺内といふ所に蕃
山といふ智者にて時を問政以善や乃志け山と号
られとかのいはゆるもの作りしと 以古言の
れとれのいはれて 中略 熊沢氏備前にして佛寺を
破壊すといへり其事実をよく詢らせ事かまず
此挙ハ翁致仕の後にして其の子息子上書して才達

然語をもちんとすれとし其著す書は佛教然諸ろさ
も大道をさしいそれ衛然なるもいふへし　下略

貝原益軒　（楽書と著すものとあまた天闕）

上略　祖父よりも以来代々福岡侯の家にして先生
ハ父寛斎の季子也　郡君三世子仕へて儒学教授
にてある（中略）鄙事記　日用ノ細事ヲ記ス著　大字の名山大川
と探求に從て是記諸國ニあるる其国の名蹟然
きしめ東路記　日光の紀行　手長大隅の紀行大和巡
諸州巡の記行然著されし　自の詩文章に至て悠唯
旅宿の事也を又記（中略）正徳甲午八月廿七日歿ス年す
時は八十五才なりけり息子は其兄存斎の次子重春
然るより家然嗣しも　先生の年譜を元禄九年
書し始め好古探むる好古今年辛廿に至十年まて終

是らく然可其以て探む墓誌ハ竹田定直録す其
銘曰　恭默思道極精　造微受物為勢天不欺　韜
蔵増顕謙遜愈輝　遠訓存　業後学永依
以銘三十餘字の外にしく先生然畫せしりてより
わりしくまことにしく　上略　謙草　好古所著

僧桃水

僧桃水雲関ハ防國の人にして（此伝ハ西山和尚著せる一方すてて筆）紀する禅林
中略　寺に住しおるに謂然りして其以て父として
其より是より旅に郭峯して酩食を全く自絶して
自ら探して年を経還化を天和三年九月に其足
其の所の是然弟子深く溝をいな後の所まちる
如是生涯の是意　蓋し破機也闕し

飢テ餐シ渇ニ飲ム只吾識　廿三ノ星霜總テ不干ラ
大津ゑのうき黄のとき此人其年老ぬると悔思ひけれ
や大津絵になりてハ佛の像とあやしつは其ふやさ掛
置く法岸として居る
蒲団にと宿にて何かとやあらそ成法生たのむひとに旅し置き
扇翁年比九還化時の遺偈
七十餘年快哉　屎臭骨頭堪作何用　咦　真帰空
偽磨き扇翁自白風清
僧無能　此僧は祖師文の書述ス儒紀事と以ス　中ような其文と伝名をかりて似す
法更の無能如き名を浄家の大徳として四十未満乃遷
化ありしは其本自り化他のり葉数あまたといへ其僧
泥頭ぶ苦の行なきはとて子等は　中冠　夜寒の行の母の堆
急とく杖形を起めるは堪ぬ　中冠　蜘蛛の網は換まりつく

蚊子鉄牛を嘴ごとし　下冠
或人曰子亦蚊子議論飢則いわるや　中冠　王陽明
寡婦ハ九相図詩の言は説て母常は未だ丸なれバ
嫁にて佐をなりし散識ちよるき煙と称るさ忌
とのへ言は訴して泥ふとふてもとまんるの
ま子らんとらや言ぶく是を誇る含くひとし挫
嘲　未人の亡ことて一生と誤る白丹とも誇へし
此諺弟子これさへるを後々しすや
長山雪子　此僧も安養寺の住山翁と云る僧一所に隠遁せしとうち申し
雪子も氷石后保長山七年其後如来て求り識師長
らも安例の網法く書とありき　中冠　古人曰凡婦人のうはをつき姑を
悪しとす　よし　姑そしいろ拙拵ふへしとぞ　下冠
甲斐　栗子

栗子は甲斐国山梨郡の農夫某が妻なりし 舅姑に孝
ありて家業を営みし 其のちに夫も舅姑も亡くなりて塩山
枚挙にいとまあらず 下略

若狭綱子

若狭の国小浜の府下に商家某といふ者ありしに某士
仕うる小使なる小女十四五歳なりし 綱といへり 其幼児
を背に負ひて遊ばせ居たりしに 狂人刀を抜て来たる 其
てとりつきけると綱もいそぎて逃まどひて 人の
子なればひとつにもかへがたしと 狂者を綱女が庭へ
はゐりて 人々集まりしかば 狂者を屏
まどはせる 其事を国の守聞きて二なく憐み
後に大なる石碑として忠烈綱女の墓と書して後を
営み 小野某 命じて 世の人 三日大俤事跡

これにはれきとめられ詩歌の作あまた遺し 子手向
ぬとは 遊東路州
樵者七兵衛妻
上邑 其夫其智深元帝のまへに 繁子とらし 漏健
丹波国 久兵衛妻
仁のけはし次を以て為し

伊藤牧亭

牧亭伊藤氏 諱長衡 字正花 通称を次 是は蜷川仁の家臣
なりき 弘化三年に生れ 幼より家にありて貴に似たり 中興
師につきて手習を学びし 一女 長男直幸は
ものあるも 日銀を切しに 是は庭下と伴はせて
切にして 其日は事に倦きて 明の日は子
ますもの館に 切りなどもとなり 奴は師に寝ませり
師まで わたし 何を以て 其後これは 刻本を

駿府吾金石垣 吾兵衛小さい一ツ者の僕 八分十一年より
以前に来ると仕へし十五ヵ年になるに家庭あるまい 好
婢ゆゑ所と出せしに 以外も年間に印しかたし 人とも貧困で
又拾て他へ引へきにあらずや 中略 其外唯主の飲をうるを
示し主を身を省さるゝ者なり 又教育かたし 中略 終に
上臈に達し候るとし 正月六日 餘五拾貫文 賞少しして
庭より下し賜ひ 府尹も是の至誠を感し給ふ 何ありて
貝子見を付合せしめて食を賜ふ

木揚利兵衛

江戸小日雇 故業と出浮 利兵衛小さい一ツ者のあるも 下略

河内清七

河内の國日下の里に樵を業とする 貧者清七小さい一ツ者のあるも
中略 或日母鶉及ばかるも 其のとのとき居りに其日を暮

あれい 明日朝ゆく 却て市にいてもとめんや 用ひ入れる
所宗にあらず 其の〻青せしかば 壹とも 戴に土くまなで
うちはるよと 枕屋へ 寄らしいとしかるに 鶉二羽 蒼々
あらはしい 表にてとくまめ 孝の御ことを至けるなり
アヒ小さ その里 新高農日下氏 伊弱山人の話如とあん

大和伊麻子

大和の國 當下郡 升田村に寡婦あるも 伊麻少いふ年六十
にあまりて 家に老たるゝ 仕へて 孝 寄し 寛文十一年辛亥
六月 老父 病苦して 日夜へて 飲食をおもいさんに 伊麻 歎くこと
頻なるに 十二日まこし 病の 辺下 あるに 餘
並ましい 日でを 咲んと 寸也とも 此里山中にして 寛 ゆゑ
あるまいいかとまへきとまと 一ツ子 煮いさく 更迄て 瓶の水
に 寄あるも 伊麻 警あやしに 起て見るに 好ある 下の 餘美

摂津國今津の里たいしや長右衛門といへるは儒学に
長して若俗を法とす爲高なきとも僕子育りて自
造園のことなかし世家なれこそ法はいかなく法はいかなり
爲りて法はいていはなく法はいかなり中略法はいかなり
死せるとき遠近の男女集りて忍をあやまて法然しなる
さ法然也佛の入滅も思ひ出しまゝ事をとりしへか
なりぎ、ゝとりしき一といふ二十心しむ人乃ゆゑ見
なる妃ありて是ほとに爲文をしたゝ法へなさくよきへ
なるよこしたまくいかまし人ありてあるへきといふ
なしとりや一洪天下の学者を砭針すといふ也

内藤平左衛門

関東乃ありし貧民子あ御しあるものは後に産せる子
を殺す是は間曳といひなくなく敬て慘ことを志

愛凍餒に及ぶるものをして倣て此事は有せるに底孤
敬あるとも高三ゝ如る小法勇なり乃侍色須加
川といふ所に内藤平左衛門といへる豪農下ゆゑ殺
おとく年一とる縁は求て乃曳んとおすふことのなきとき付
こち養人に財は有て救ふ下略
什学稿を見て幼河法師曰昔もろこしも子を間
曳敬ひありて有道の勇子是は救へること群論
採餌まくあしと弔うつして鎌くる賈彪爲
新息長小民貧困多不養子彪嚴爲其先
殺人同罪数年間人養子者以千数曰此賈父
所生也皆名爲賈又東坡曰鄂岳間田野小人例
只二男一女過此則殺之云々是はまゝ先して救へるよ
平ゆゑ文長なれは略之官人是を救ふ事を仁政少々

（以下四条三字下ゲテ書くべし）
一、安居しつゝまじとし志あまし〜ば為安く庶人にして金を捨
て叛すは若何にする〔し〕中原に地を尽して樹達胎子乃子
は為濁乗の教をなさしとし是は公人の（所為にあらず）只始終
ことなりとなすまじは叛に之を述べし欺くべし

寺井玄渓

寺井玄渓ハ其父本多侯政利ニ仕ふ其国除して京
士となりし後玄渓京師に居て医を業と以元禄十
三庚辰歳始て浅野侯長矩に仕へ医をもて江戸に伝
ふ明年春侯吉良氏に傷をとて消尽（切腹）國除ん
ぞまず日衆とともに赤穂に至り遂に退て京師に至る後日
義挙乃事ありて赤穂に至りて諸士とともに参画（はかりごと）あらん
とせしも孰ぞ京に東行せんと欲するに至て良雄（大石氏）
去りてとゞまるべしとて其月台乃手書を与へ且三宅の籠

讎の復讐録にも出たりし　下略

予按ふに是おなじことあり禮檀弓に子工尹商陽（楚人也）陳
棄疾と呉師を追ふ陳棄疾に謂て敵を射ん
一人を斃すに其目を掩ふて其弓を弢て
いふ（とりて商陽は士なれはあるべきこと）朝にては不坐燕にては与らず殺すこと三人と（朝は坐し燕は与るは大夫以上を許さるゝ）殺すも亦反命するに足りと孔
子曰殺人の中にも有礼と云ふ　中略　又義士の中三村
包常（次郎左衛門といふ）は従来厨下の吏（さいところ）として其主始めより
卑き者（はけしの者）は国士の諸士あるにいは
財を貪るもあらんと疑しからず始より表を変せ
御ん其禄を食ては其難に死すべしと尤も人の感る
べし　下略

○大石氏僕

○小野寺秀和妻　附秀和姉　秀和訴哥

赤穂義士小野寺十内秀和妻丹子ハ灰方氏の女なり義
気風雅倶子貞夫の行ニ配して志を同しふしつましかりし
なりとしハ秀和とともにわかくしける　中略
丹子の詩
者ハ其人墓を治し云々あつて蔦通行まてみくるり
松平讃岐守の家臣秀和の伯母
きの京都にのこらへしハ其のちにむすひて生のよ風
出家かくて御ハこえへし（一）ものちに
かへしれは秀和同息秀富幸寄自盡と終
なる故あれハともにてや旅日会紙見て弟子酒ありし
遺言
小野寺の奉の記し
書を子されまらんとの返し其の節ハ幹弟車ハ時ん住はよのらへよ
の氏墓一おと碑さのこ紙去自滅と記す其ま八
母はりて兼せんの恩にも秀和姉も同義士太言
姉ききの母あかりハ是ま兼行り早ほりまた志し離て源女姉

文子ニ敵しとものあくともハ赤穂にても
義士の人頭もハ有り　中略　歌妻あすまいとて
にたかそもおよはしきに
秀和のかくも妙ニみし［illegible］夜雲の［illegible］あつ両人出されり
と紙乃寄ニ寺妻へ一の道中よくとしあふ坂のとは
分まても又あふ坂やたのまぬハまく一やせ帰し
あれ山路一めうされさりとそ［illegible］
取ころそむうよ中のもとて
まかふ都子帰を旅への姉子まさらん弟人り一中
まれきとお報のしれ西のけ子兵りて［illegible］
中興まい義なりる二月三日の丈子幸蔵一ととさ安
くおりひ行ふへし敵ふとまそあまらつきし
迷下名子ともみけ梅のよは心の露ハはるのまあは
承之にまるまハ［illegible］とゐてさんしゅひあきく

よこの哥はしろかねのひつけしまゝ中へ日揺印よ
いろく乃長の賢菓とおされ是を見て
むさしの〻雪月もみくつ古の〻いもり垣に乃鎌もん
凡四十六士乃詩哥を俳とて此一筆を書せるもの
りみえしハ大りき市井の男女もの者乃海岸と
松浦三光氏も志りハ可此光のうち右手筆ハ可
ことに蹟れうつしまてかゝりて世間見小説にハみえ
とのし猶数ぞあまたもことにしつその年自のうちも
みしかま老好述懐
老ぬまはよ所まなされていまし（紙漉とまま紙の
下略
○屋敷読　附曲の年
敷読は据所の士菅沼外記か妻し　上呉

○遊女大橋
○遊女某屋
○石野権兵衛
市兵衛
正妻

上略　兵衛左手学紙好き堀川の流紙慕ふ中保市兵
さ八甫と号須伊夜東涯松邑玄達二先生ありしと
されて談話をしかし世子名人すくれし筆庭紙録
まゝ印くて文よむことハ此一甫のすゝめよりと　下呉
○隠士石川
上呉　みましれハさくらの郎よ笑まなしむやりもりて心とも
人家まで庭の泊くて紙
一本ずつ紙とりにはれ咲つゝく心ハむよりやうるとの
○賣茶翁

「建水 終南銘 高一寸五分半 納汚ノ二字アリ
「瓢杓 竹柄 長寸 芙蓉書 竹柄ニ 將來剖破成雙器ノ七字アリ
「吹管 長八寸二分 蕉中題 銘ニ 大其小題其微汝其[illegible]於為
者耶 東湖 散人題
思孝曰翁肖像見翁偈語故不贅今所図茶具者其燒
也之餘与所摸造俱藏浪華木世肅之家云
自警偈
夢幻生涯夢幻居了知幻化絶親疎貧策萬乘猶無
足退歩一瓢還有餘世事心頭情自寂世心事上
境都如此吉倚筍得體斯意廊燕胸襟同太虛
仙窠燒却語 仙窠ハ是具籃名所以鬻ニ薬茶也
家從來孤貧世地無錐汝估輔吾曾有年我伴春山
秋水我鬻松下竹陰以故飯錢無缺保得八十餘年
今已老邁無力于用汝小斗藏身將終天年却後休
厚世俗之手於汝恐有遺恨是以賣汝以火飛三昧
直下向火焰裏轉身去轉身一句且如何良久云却火同
然毫末盡青山依舊白雲中便身兩丁
乙亥九月初四
八十一翁 高[illegible]
「蓮華王院南幻ニ唐而浮世美ハ大宗暦十三年癸未七月十六日」
○江村專齋 所剖齋 專齋ノ字ニ
上略 壽百年を[illegible]ハ 後水屋上皇仙洞ニ召
て修養乃法を勅問あり不奏まゝく平生唯一[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天々少せも粧あきことに小末ぬれかふにて物知いなる
此翁の出し老人雜話といふ人あるとおもしろき苦かなりし

○北村篤所

篤所小村氏諱可昌字伊平昂通名とは近江野洲
郡小村の產也 季吟法印 仁齋先生の門人にして東洲に
倚り書て 儒林 儒巾と訓せ書せて 學ゆ句せのふ 下略

○西生永濟

漢河藩生郡市山の里新源士永濟は西生と旅す 中略
此人とと從世井屋に親しく筆通い筆もは市山に
不居とり境 是もの地名 皆ワ雅に筆通 花人に補せて名つきよしの新
成ほく浴ひしに固く辭申て
みことのかしこくはあれ少なとせ 市山のまつやうに見ひ
とまゝてなりぬ出よ 浴せるとまゝとなる 和源の老人にて

小村季吟法印の著せる和源新語集の抄子可に注
し詩を永濟の注紙用るよし 此人なるを古新
に著し歌も清原元輔の集に問ひまゝて れかしかしに
うとかしこ 市山新中の枝紙といふと 新もはなる
是を大如の市山所りを近江に新用しなるも 學者の小筆とれなく
中ぬと 口望新人富田氏の話し 下略

○岡周防守

岡周防守某を 備前國 通利家の神職にて 神學の名高
して 弟人し 下略

○青木主計臣

青木主計臣 長廣は飛騨國 長岐 某社 祝(ハフリ)をなし岡周
防守少ひとしく神學とを 學西 中略 都にのぼり源を
しか 所に名を 名人所をいい 桜所代りしけれく

記とかして五絵に神代巻と誤せし是宸翰とさへ称
ことなやうて是と芝をかけて行かなりなりと以て行
所も法師なれば罪の玉くるを遊りは如しの山に入り
ときよめる

如し所に紀にかくて見れば家をの様に称ふ草を見し

△玖云自巻首至此人名一人不残盡載之以下或不載亦有之

○隠士長流　此伝見安芸為章年山井閑

和歌宇多ノ産し　中略　歌和歌無　契沖師小之山人
同し師し契沖十七歳の時のうち紀見て老を悲し
才能の友小之なるよし契沖の徒弟剛もりあるし

○僧契沖　陌州人　今井似閑　野田丸蕭　河州芝沖

僧契沖諱空心俗姓は下川氏貞先世ニ近江蒲生郡
富渕村に住す祝文左衛門元宜か藤祝護彦に仕ふ父義

会藤元全居崎青山彦に仕ふ師寛永十七年庚辰
居崎にまる茶甫（ハヒヨシ）西山氏母間氏口つかる百人一首紙
掠るに不りにまく記録す父も宣統あるを掠るに以同
中略　水戸西山（義）長流の果さく望し万葉の注紙此河間梨
小が注し給ふとて召しかともこれも師に周く旅し老を乗ら
ま無きとも公の古義紙如之の事をよく説こひ遂に万葉
代匠記廿巻惣釈二巻を作りて乗らす冥巻第一首雄
略帝大法哥に仙鏡の字乃訓とせし次古とよこきしを
当紙加古（カタヒ）庭と訓し神代紀の無目（ニナシ）堅間（カタヒ）紙詰と次西山
公その事見紙よ論こひ且ことおぼすに而に会ことは奇とし
給ひ有金千両給三十匹と知いて是を学ふ師郡古
説の修造に充（アテ）り所貧令のものを賤して一も高にす又
出今解材料を著す明石紙うらの帖雪乃うち古注脱

鐘絶あるとき

やくとみておのひの門を出しかと 鐘絶てを経るもなし
なし 長流のうしたよりも やくとうかにおほゆ 又この河の國文
高吉まして 新体あるも 左学べき 妙好なり 下略
○荷田春満 附経在満 門人加茂真淵

春満 河至万麿とはしまふ 姓魯 荷田宿祢まして 羽倉氏とは
直公 麻呂 洛車 稲荷の祠官なるとも 家を嗣す弟
成まとし 自ら 國学の復古 任と 神代 下 業集
まれいて 家学成 出せり 斯神と 明を 同しくして 是い
後学 彼説を 志るや 志る 須や 斯神を 佛者なるに
其人 鎌倉 にて 源帰せるとのも 何ぞ 見 以前を
一層 学りて 説を 書 ねて 元祿年 間を 諸道 復古
新運 にあるまでは 所まして 思ひ学 明ふ 斯神と

以前 明るも よみ 弱きことまする所に 何ぞ 何ぞとも 又 此
ら須 今 ねなへしい

事ふられいまの 小の 淵を あまり 深 後 ふ ひ 世の 物
なかいとめてとしや 又 中世 已後 隆 廉 風 となせるとい
よとおりて 生 産 悪 哥 を 泳せ 其の 家 集 とする 高座
によ 歌ごとひの 歌を 掠りていこと 物を 雜 にしてよ
たとへ 虎 ふ まする 志ひを 雜 によ ある 事
佐むくつおのひ 正 提 使 に たぐべて 虎 もつる 物 まきものと
日本紀 欽明 巻の 故事 によりて 読 しも 学 者の 志 ひ 給 ひ
註略 悪 哥 とよ 海 也 ひ 方 正 右 黄 まし 夷の 訓 訴の
ハ 弟 も 書 に 著 に 論 あるも 其 は 荷田 三 峯 子 の 拓 まりて 國 学の
此 前の 家 集 と 按 考 し 序 を 出 しまも いへるも
学 様 成 京 師 に 発 んとて 庭の 許 とうも 既に 東 山 に
まるに 及ひしも 今の 東 本 殿 を 墓 地の 色 とし 病 に 罹 りて 年 を 経 不 逝 て

師行 祝詞解。又祝詞考伊勢物語古意。安定
國意語 敷土部ゆゑ 主の 萬葉新採百首解 以上三種 百人
一首うひまなび。淨土三部伝 公樹言雜。二部以印
此外人所用に著て著る所作れ歌の解の書也
小冊に數部ある此行人の中 茂原宮百伎。楫取
巣喜も御に著述ある世間に學ぶ人なり 下箋

○金蘭齋

金蘭高い志の志莊者にて四三境界も是に上爲り 中箋
あるは道語にて女所常の結びを指さし 派宗して
先之物者の世間の部小にいひしものなりしとて 下箋

○小西來山

來山は小西氏十萬室といふ俳諧師にて浪華の番今
宮村に幽極する人曠達不拘ひとへに酒を好む 中箋

筆の絵賛に以その物を言ひんとて其物を換ふと詞法にて
外所子を外にせんとて外の頃といふ名なり行状にくらべて
おもへは志莊者にして俳諧に見する人にあらざりけれ
さきはいにて其家世も以來山いふ師にしたがて死なるし
そもそもうらこれ何れかとなしといへり少なん

○文展狂女 ふみひろげの

上略これは織田信長のおとゝのわかひとの小野乃お通に
語りへしちまといふ一名女都乃高人表茂左衛門といふ
見ひて以ひそこて語をかまはしこと二とせ斗おもひ
あらはしる秋所著に

うやましへ女なきはの蓋なくも四の御なしかなる
少しとてうちぬしうちなるも 中箋 雌喬の三十六の口歌に
絶たつるものとは見法に法ふ乃いとゝとたのつる 中箋

中略 小野乃お国（生詞去玖法ニ乃所し）ちよのさあよ女の男乃かたへ相く
まゝ又れ申よ
とふかへ手折ゆしことのたりひめ紙恨むるゆゑ契り給
下略

○僧湧蓮

僧湧蓮ハ伊勢の人高田派の僧し 中略
古ハ此ゆゑの法ハ乃りとへけ人あるとよ
志れてハ麻笈まるとゆゑなよ子ハ志あるとも親のれとゆ
人のしよ舎のあとまくらをいりたれ春あは白髪
きみ紙段乃ふふ付て 可去身よといひしかが
拙ゆる麻ゆうまゆる汝ニ 浮家家れ ことをあしかる泥也あるなよ
矢部の正子ハ 中略 法へり出る時何かまゝ見よみて
給へといひけれハ

此末の身乃はらあらんをなくても世の常なきさトナニアリ をしひ志るゆ
歎志ゆ
いつもまゝ給しく起て法とあはや意まられしまゝ古服の身
拾し世紙程と思ふの事なくハ拾ゆる物をを又やいとはん
泥をよゆるり
うよて立雲紙なりそれとゞえまて子ゆゑと落ゆる山の流つと
奥程来史といふことゆ
菅ゆゑ程まて今せ身と見えて己の大井とけしのかもあり

○柳澤淇園

淇園柳沢氏諱里恭字公美一号玉桂酉名権太夫
大和郡山同姓の士し文学武術を始て人ゆ師ゆるゆ是
まゆ藤二十六子乃子ふ少しを俱学すへ心好て俱会論を学
し僧とありけるとりや中ゆも画ゆ長す朱学水傳来

和新色乃清紙紀の祇南河に等てことなる人物を設
色世ことに紙黄にのるに漬し物紙用て操洗へとも蔵
まさなん中略凡所為人の名を不知るハ王子猷に似
たりとやいとん書を好むハ鄭莊孫北河乃紙なり

○池大雅　附書玉潤

大雅池氏諱世臣河利と唱ふ字貸成画以秋平青原
ハ或ハ九霞山樵と云ふ京師の人為人蕭萌寵厚とも
此紙抄とあり法を善物に化して苟も合し志を解
さるに不躁数にして内実修人と交て論換し志の
も物も称しに祇法に簡にして法にて法を蒙
くして蒙へて是紙蒙にうへるとこれハ中まうつて
失とこ語ある頃恵て其望廉まして其巌を取
[illegible]失に物いて恬如さり中略神書拙様と法如

青中清光院に学ひ浮吉法帖をとりて晋宋に
浙省に画を紀國より注て祇南河り画法紙とし
又大和の柳里恭に採色の法紙学に又土佐光[illegible]
り玉画の法を学に時に望玉蟾と云も小従来画家
いまゝ浮法紙学ひ寸とりに是紙はしかんに玉蟾
ハ黄伯虎とまゐひ此蒙を拙是人を学に各売に一
家紙成を得て後又倣雲林り倣へり浮法の山水を
画んしめたりこの蒙面に図して自想へ上江美浪
屋張の園々に告んと寸人多怪て賞者なし於是
むかしく来へ帰らんとて漱田の橋紙にとまこ
扉を出しことく多渺水り投して日是をもて紙
玉紙多くと持いく得とすく青画新美河内に擅
なりに古行る多人の石をなす物を話といふ或時

難波を出せしかり筆携るてと我忘る妻玉潤見
つまてもちてはしる建仁る此等まて追つきて
捩る不道人如しいとき いつこのくそよく捩ひ給り
とて別さる妻と御ふ言なくて頃まりて又近江高
嶋の廣のほとゝ小て陸子我面く京を御りて浮と鼓
を鳴ふり夫云礼殺をつまて謝をゆはるへしと在
人語してやりて為鳴まて袴我気なくしけり

○求大雅僧
○沢村琴所
○苗村仮洞 浙妻也

沢村氏は吉原根源士 中略 松井幸隆亭まて洲和家
和蔵ハいろようつゝ不波の糸ハ浮てかなし我大人ハ
江の浮とるを知してよ河まとる世情のこと也

神ふそよ今江の水草枯てしもよ法の蛍ハ知りあるを
即事
幽斎讀書つ居 静味 昔鳥鉢 遥見前村等 隔牛
庭ハ稲ノ毒
○仮洞は苗村氏 酒を道を宣世し 蛍我業として
土江ハ嘯不住す 中略
西蛍
捕渠計盡復防難 開居偶然見自残 王粮子空憎
爾黠集回誤把腐鍊丸
○望西祐庵
祐斎は小村氏 淡河望田の湖の豪農まて菓子を熟
物乃味我吉ことハいよしへの芽 詞 昌才も 砂す 下巻
○久隅守景

書策者久隅氏通名半右衛門探幽法印の弟子にて画を
能す家貧なれとも其志高く容易人に画与す庭を清く
明し　中略

拙き者なる書策か為に人のしらぬ寄し居る人紙をもて
たのむことは不肯して又謝を来り人の不寄し書策は
應ぜず不肯不能し[illegible]八数[illegible]紙し[illegible]八
訓を[illegible]て人の筆紙をも[illegible]ぬ[illegible]

○廣沢長孝

長孝は通称氏名筆友京師の人にて廣沢は字長孝と号す
あのや[illegible]とて歌字は貞徳翁の[illegible]人し[illegible]
みちのく[illegible]の[illegible]書し中之[illegible]
筆をとも海は[illegible]のうち[illegible]て[illegible]路ゐる[illegible]
[illegible]もやと[illegible]紙海に[illegible]人[illegible]

[illegible]ある[illegible]の人[illegible]庭紙[illegible]て
つ[illegible]孫[illegible]まて[illegible]六[illegible]
[illegible]の[illegible]やる

筆法之書

[illegible]八ま[illegible]の[illegible]基は筆
[illegible]或宗匠[illegible]似書
[illegible]也
[illegible]の廣沢の[illegible]人と[illegible]下略

○僧似雲

姿[illegible]の[illegible]廣嶋の人なり　中略[illegible]山の[illegible]大井の川
[illegible]川[illegible]の[illegible]紙[illegible]
[illegible]の[illegible]山[illegible]花の下に[illegible]
[illegible]て[illegible]

[illegible]の國[illegible]

下筑

○小山友松子

友松子は小山氏通名春安といへり長崎の人貧人丸山の妓女に急して産る所也といふ醫をもて本身せしとしよその系図をこゝろにまゝ長崎妓女の子とのみ出すて却しとる笠量を世に称せしとて 中筑

又黄檗の宮祖及即張三泉の諸大宅賜ひて弟をしるといへり中筑 凡尚明は医名ある人也以とも東垣丹溪の鶴座をいつることにしたる事不獨り長崎の長まるを観龍とし 下略 東洲諸家とも採て法使と須ふ言曰如為人治療則不可不全 續仲景之書也又文字の法を明らかにする所增廣口変集に中山三柳の文章文字を改正せしに小見田 中筑 或は医人と商量則告し 下略 親族を不別ず 或は紙見ては人に不讓 觀面に辨明し 或は誤り紙ゆるては合糊に不思 舊直に討論に唯此人に補なくして方すに愧ることを知るとし 原世医或は粗とし 或は直とし 且答且毀るとかや 門人乃請ふ 下略 而其刪補衆規能。詳議纂云方考增補口変集 皆以十未備の所為也 後又方考繩愆出る凡著述他の出ふ 下略 吾ことを述るものにして一家の成出なし 是民一家の所立なるへし 下筑

○戸田旭山

旭山戸田氏自号元潤子毎居無妄東備の人浪華にきて医紙業と浪門に斜医戸田無妄也

標をもとめつし中興者川太郎秀房の第選紙
雖して珠菓選紙著し御行き志すまとも而し
秀房乃才を惜してその子ハ志まり州生せるま
如こすまとも志しきとも志りまくめとも志りきと
志るといふ屋し医療をしよ里よくまゆしとも
病実於人を所て此奴闕さまハ也し他人紙療を
る志と申し故に貧なり 下興

○僧文艸

文艸俗姓は内藤世々屋居太山の居し能毋り住人
て孝あり弟をそのまるに家紙譲りて心紙
慰んと誘り右の指を疵身て刀紙捕捉をして
法を辞し剃髪し禅紙宮と呼ハ也内乃口号
多年刀員屋一蝸牛 代做蛞蝓得自由

火定晨惶誕沫畫 偶尋法面の林丘
源風をきゆると雲れやと里り昭
中興りと詩文紙如しか又芭蕉乃箱小従ひて詠詣
紙よくまゆ中興ニ也門人の名ハ志とを敬云兼して
故宮を者て又漢子詩り夏紙月
朱とその之ハ紙をさるとこうへし元禄十七年
二月太白の栗津の紙り丘佛初房小家ハ
今夫人号の也とりやとのし

○有高源及 附子孫之人

有高氏源及の名父子兄弟小及ほして同世医を業
とす伊豆氏と同世名交りあるまし蘭嶋の傷寒論
神能の序をもるハ紙疾にんまの考すれ東涯蘭嶋
兄弟を経るなるへし世々主手の名ありまて世々
不拘ここを粗怒得ふ事の笑話事 初代源及号

寺古時の冠服宮室山川の風俗は五百歳にして正しく
聞えしかは花宮にてもしかして画不並何日志を悟
里山好画紙筆まとい人里 王笑

天明八戊申夏四月日

花顛三熊 思孝

閑散錄録鈔

完

居。以海昌生、仁齋嘗愛程子易傳云。此是論語以來眉。仁齋少陽齋

[illegible]

□ 閑菴 伊勢 南川維遷士長著 明和七年庚寅冬十月 [illegible] 跋閑菴餘稿贈 菰野南川士長

菰城一閑風流客人道男兒南川生子建文章推繡扉適之豪飲似長鯨青深沈殿蒼茫蒼林敷碧塗美月明黃菊由來多服日輕伴鞍花著書必安紀元至日 彥藩儒學教授安水北公美

江邨北海ノ序云 可以無也無亦何損乎已焉不可以無也是則有益乎人焉蓋不可以無也者世常有而不以無也者比比屬蓬出而蓋集焉天下之事大抵蕭斯豈不悲一手譬之著作乃亦然哉近日浮穢之徒昫黃未精唯名之趨今著一眉明著一眉充棟汗牛要之非屋上架屋則舟中行舟不啻無益乎人適足自汚其將謂之何若夫不可以無也者絕無而梯是如閑菴餘稿是也下畧 ○閑菴餘稿緒言 近年梓行眉斯文源流門儒林姓名

録アリ姓名鄙里師資ノ相承其詳ナラス（シ）ヅテ傳流
姓名孫ニ見ユルノミ此書ニ略ス△吉備ノ書ニヒテ此方ニ伝シモノ近頃梓行
セル論語ノ皇侃カ疏下野国ニ刻ノ学校古文孝経并ニ孔安国カ注并ニ
宋ニ旨リ元ヒタリト見ユ仁王経ノ注ノ如キ智者大師ノ作書ニ久シク亡ヒタルヲ恵心僧都
ノ如キノ書ノ誌ニ因テ彼ニ贈ラレケレモイツトテモ風浪ノ災アリテ海中ニテ失ヒレトン）
△近頃ノ僧士ニ孫姓ノ人アリ是能鮮ヲリ出ル姓ニテ孫陵生ノ苗裔カト
云其詳ナラス竹雨齋詩集ニ見ユ又別ニ日本紀ニ孫豊陵トアレハ孫姓
ノ祖ルモコトハリナル唐ニハ扶孫豊トアリテ瑋ハ其祖武王ノ名ニテ
扶孫ハ百濟ノ氏ナリコレヲ以テ見レハ孫姓ト云ハ誤リナラン又鮮ヲ
我国ニ来リ住シ名人多シ或ハカノ国幾僅ノ時ハ其民ヲ吉国ニ移サレ
アリ又別姓ノ人アリコハ唐土ノ彭城ノ列氏ナリ故ニ或ハ彭城ト称ス
長崎ノ唐宦ノ内ナトニアリ姓アリ鉅（カク）鹿氏アリ己ハ鉅鹿ノ郡氏ナドゾ
○儒ニシテ佛ヲ好メル人唐宋ヲ以来甚多シ吉國古昔菅家ノ
山崇圖齋本下順菴ナト見ユ百五十年以来僧侶佛氏ニテ儒ヲ好メル
者ニハ南浦文集書洞策ノ玄光護法集豊臣ノ道喜肥前大慶院隆
加州ノ妄隠心学典論主教尺読多乳箇葉ヲ著セリ大
名ノ国中才右衛門ヲ外一二ニシテアリ佛ヲ出テ儒ニ入モノハ惺窩先生
山崇圖齋本下順菴ナト見ユ百五十年以来僧侶佛氏ニテ儒ヲ好メル
ル人ハ希ナリ
○論語ヲ圓珠経トイヒ皇侃カ義疏ノ巻首ノ語ニ本ツケル事ヲ
従ニ皇侃ニ出ヅト云佛氏ニテ儒ヲ見ストイヘルハ義疏ヲイヤシク見（ミ）ヨウ（ウ）ル
ヨリ云ヒシナルベシ
○国学ノ見識ノ述ベル所ハ自娯集（ゴシュウ）惟思（イシ）孫ヲニ
部アリ晩年ニ大疑孫ト云書ヲ著ハセリ其ノ大ニ宋学ヲ疑フ中ニ著ハレタル
細来ノ集春臺ノ文集ニ和見ユ
○石田氣ノ撰ニ学ナガフトイヘリ長カノ後年ニアリト聞リ

吉洲ノ伊勢ノ俗モ苦ヨリノ名アリ中略但羽津楠色茅ノ海多シ多シ古ヘ楠邑ノ千南川トイヘル里ニ山アリ山下ニ嶋右衛門トイヘル老翁アリヲ人ハ弱年ノ時ヨリ両夜見タル夢ノ後ニ見タル楼閣ノ中ニ柱ノ飾リアリテ玉奇巧ナリト雖モ始出シ所若名ニツラツラ煮シ死シ蛤ノ気ニテナレルニアラサレハ楠ノ南一里ハカリニ郷アリ其名ヲ長太ト云フトカヤ訓セリ名ニ負ヘル如ク海中ノ青松ノ気日ニ映シテ青ク現ハレ千尺ニ楼閣ノ形象ヲナスニアヤシムヘシ

○京ニ竺書玄蕃トイヘル僧ニ詩ヲ善クスルアリ嘗テ詩ヲ以テ人ニ贈ル千家ノ詩ノ体段ヲ主科玉條トシテ夢ビタルヲ玄蕃ニ至テ初メテコレラノ書ヲ得テ読解ヲ遂ケ倡和シケリ杜律ヲ桐葉蕉トイヘル詩集ヨリソノ内ニ妻ヲ亡シ時ノ作ニ失歌ノ詩アリ盛中ノ絶唱ナリ又他見ナキ人ニ多シ山左夫子ノアリ玄蕃ヲ

ヤシ先輩ヨリ芝軒吟稿ヲ著ス徂来ノ評ニモ晩唐ノ宗匠ナリト入江若水ナトソノ人ナリイツレモ白石徂来トハ別出ノ作家ニテ京師ニテ詩道ノヒラケカケリシ時ハ此人ナリ

○古ノ國ノ学校惺窩先生ノ頃ヨリ四五十年家ニ至ルニテハ古文前後集ヲ書写シ講ヒそんつり故ニ古文ニ標注国字ノ解甚多シ那波道圓ノ説ニソノ頃ハ隣王閣ノ席ノ名ナリトイフヲ秘授ニ傳トナルヘシ遂稿ノ内ニ見エタリトテ古文ヲ学フハ大章軌範ヲ学フニ如カルヘカラス眼アル人ハ知ルヘシソノ人ハイカニ心得タルヤラン

○朱子家訓ハ朱舜水ノ国ヲ持来リシトイフ然レハ朱子文集ニモセズ朱門ノ人ニモソノ伝ナキヨリテハ手思フニ徽庵カ法帖ニモコノ家訓アリ中華ニテハ久シク伝来セントハ見エ且ソノ言名教ニ助ケアリ朱子ノ作トシテ子弟ニ教ルモ何ノ害アラシ

○伊藤大師入唐ニテ天台山拜謁ノ時彼方ニテ遍ク名ノ聞エタル僧侶ノ一紙ニ書記ノモノヲ得テ帰朝セラレシカ其後ニ至リ唐人ノ知カタケレハニヤ古雅イフヘキ真蹟和州多武峯ノ寺院ニ蔵シ置リシカ其ノ中ニ従者丹福成トイヘル者アリテ中古ヨリ何ノ神ナルヲ知ル人モナカリシニヲ経川ニテ見出シ

大師従者ニテ唐ニ往キ

○其国ニテ真ニ老荘ヲ好ム人甚多シ

コノ人実ノ老荘者ニシテ心ヲ変セサル事ヲ感シ

ヲ刻ム即蘭亭ノ解ヲ一冢ノ見識アリソノ陵ノ墓生ノ荘ヲ杜撰ノ

蘭亭ノ暗誦論トイリトソ蘭亭ノ序ヲ講説ノ

ナシ

○唐山ノ葬倫ノ初メ九条家ノ法式ヲ用ヒラレシヨリ

○本邦ノ講究ニテ物産採薬ヲ

ヨリ始トイフ稲生若水ニ至テ尤盛リ貝原篤信モ本草ヲ好ニ大

和本州ヲ著ス若水ノ著述百餘巻アリト自ラ語リ韓人ニ序ヲ乞

タルニ曽和集ニ見エタリ然レトモ世ニ伝ハラス今ノ本州ノ新校正ノ名ヲ若水

ニ託シタルモ和名ニタル当リ兼ネテ云ヒ初ノ京師ニ住シ加

賀ニ聘セラレ加賀ヨリ江戸ニ召シ表事ヲ蒙リテ無物類纂一千巻

ヲ撰セリト云フ松岡玄達ハ若水ノ門人ナリ本州一冢ニテ撰スコト又世ニ公ニ

世ス用薬須知ノ類薗品櫻品ノ数一巻ニ纏メノ冊子ノミ刊行セリ

玄達ノ門人多キ中ニ陳元貞ト云フ如蘭ト号スル加州ノ産ニテ京ニ

先師中好学名加代帝王

此ノ事中ノ五ニ別ニ衣中ヲ賜ヒ其中

ノスノコトイヘル所ニ行テ眉ヲ潤セリト云服ノ道服ヲノ類ヲイヒ

欤ヲ以テ作ル縁ヲ漆ニテ塗レルヲイヒ

仲共ニ其家ニ傳ヘテ

○本州ノ講究ニテ物産採薬ヲ事トスルコト向井元升（号蘭先生トイフ）

ヨリ始トイフ稲生若水ニ至テ尤盛リ貝原篤信モ本草ヲ好ニ大

和本州ヲ著ス若水ノ著述百餘巻アリト自ラ語リ韓人ニ序ヲ乞

タルニ曽和集ニ見エタリ然レトモ世ニ傳ハラス今ノ本州ノ新校正ノ名ヲ若水

ニ託シタルモ和名ニタル当リ兼ネテ云ヒ初ノ京師ニ住シ加

賀ニ聘セラレ加賀ヨリ江戸ニ召シ表事ヲ蒙リテ無物類纂一千巻

ヲ撰セリト云フ松岡玄達ハ若水ノ門人ナリ本州一冢ニテ撰スコト又世ニ公ニ

世ス用薬須知ノ類薗品櫻品ノ数一巻ニ纏メノ冊子ノミ刊行セリ

玄達ノ門人多キ中ニ陳元貞ト云フ如蘭ト号スル加州ノ産ニテ京ニ

住シ専ラ向ノカ（まち）ヤケシ氏物産ノコト精密ナリキ今ハ物故セリ今ニテハ浪華
ニ戸岡南皆京師ニ面麻元周江戸ニ田村元雄平賀國元内コレラノ
人皆幸ニ名アリ火浣布ト和名ヲ火ヨケズト伝中華ニテモ葛珍ニ重セ
ルモノナリモト蛮国（モノ）ヨリ舶（モタ）ルモノナリ紅毛人ト持（モタ）ルモノナリ紅毛モ亦ヲ制スルモ
今ハ絶タリトナリシカルヲ平加賀氏考ル所布テ和メテコレヲ制ス平甲申
ノ年浪華ニアリ戸岡氏カ物産會ニ出テアリ見ルコト得タリ予ト
見ル処ハ竹布物語ニ火浣布ノ事盛ニツクリ名ノ
イカニモ烈火ノ中ニ入ルニカワテ燃ルコトナシ真ニ奇品ナリソノ席上ニ一好事
ノ人リ甦ヲ視テ白ク是石綿ナレトモ是又異服ノ人トイフベシ平賀
氏ハ肥後ノ熊本ニテ其法ヲ得テ作リ出セリトナレコノ外本州ニ精ヒキモノ
三都及ヒ諸侯ノ国ニ分處サ撰述ノ暇アラズ
○中村帰斎ハ忠信篤実ノ学者ナリ常ニ学ニ音律ニクラシ朱
子ノ気質ヲシル処モシルヲ以テ朱子ニ勘カレリト思フテ朱子ニ面ヲ
ナドンイフヲ見シガ其人品ノ盛ナルヲモヒヤラシタリ故ニ斎帰流ノ学風
ヲ見ルヘキ帰斎ノ名物ニハ精シケシダ修理ニ命ゼラレシト評スヲノツカ辞
ヲ修ルヨシヲ毫（ホサ）ニホサシタリトゾ
○山崎闇斎ノ居（ヲル）ル京都ノ土ヲヌノ（ヌル）ノ事土ハ村田氏ノ産ナリ幼ニシテ天台山ノ児童（チゴ）ト
其アラビシヲ南リ回リ闇斎ハ播磨ノ人ニテ幼ニシテ京都ヌノ（ヌル）ヲ出家シテ
ナル時ニ学ノ土州侯ノ廻（カワ）ルヲ見テ大ニ用
ヒラレ甫（ハジ）メテ実ニ英物ナルコトヲ知リ請テ土ヌノ
ニ陪ヒ帰リ邸下ノ寺ニ吸江寺トイフニ於テ薙髪セシニ長ケルコトヲ
才名日ニ増長シ真ニ傑（ヒイ）ルノキコ（ヒト）アリ時ニ主ヌノ（ヌル）侯ノ大夫野中傳右衛
門トイフ人儒術ニ達シ気ヒトリ子ナシ闇斎ヲ招（マネ）キ養ヒ子トス闇斎ハ
ヨリ帰シ勧メニ応セシムルコトヨリ山崎嘉右衛門ト称セリトゾ
○野中氏ハ土佐侯ノ上大夫ニテ世ヽ儒術ニ富ル兼テ往来地理ニ通スル（ツウ）ヲ以
ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ヲ以テ国中ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ノ人ヲ（ヒ）ラ（ヒラ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ニ
善（ヨク）我（ワガ）ヲ元（モト）ヒ（ヒラ）ク（ク）ノ遠（トホ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ヲ以テ国（クニ）中（ジウ）ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ノ人（ヒト）ヲ（ヒ）ラ（ヒラ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ニ
善（ヨク）我（ワガ）ヲ元（モト）ヒ（ヒラ）ク（ク）ノ遠（トホ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ヲ以テ国（クニ）中（ジウ）ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ノ人（ヒト）ヲ（ヒ）ラ（ヒラ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ニ
善（ヨク）我（ワガ）ヲ元（モト）ヒ（ヒラ）ク（ク）ノ遠（トホ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ヲ以テ国（クニ）中（ジウ）ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ノ人（ヒト）ヲ（ヒ）ラ（ヒラ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ニ
善（ヨク）我（ワガ）ヲ元（モト）ヒ（ヒラ）ク（ク）ノ遠（トホ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ヲ以テ国（クニ）中（ジウ）ニシテ（ノ）ヘ（ヒ）ラレ（ヒラル）ノ人（ヒト）ヲ（ヒ）ラ（ヒラ）ヒ（ヒラ）ク（ク）ニ

側コヲ許シテ郷士トス一郷ニ五十人ホトノ郷士ノ住スル郷アリ今ニ毎年正月
十一日ニ侯ノ前ニ出テ甲ヲ著シ馬ニ乗ルナリ春臺カ經濟録ニ土州藩
州ニ郷士アリテ古ノ兵農ノ儀ニカナヘリトイフハコノ事ナリ又土佐ノ国中ハ野中
ト圖南ノ餘澤ニテ今モ火葬少ク儒葬多シトナン 野中氏自ラ山野
ニ歩シテ地ノ利ヲ見ル一人ノ老農ニアヘルハナシ
○圖南初メ僧ノトキ絶藏主ト云フ墓ハ皇谷ノ山ニアリ出雲ノ社地ニ靈ヲ
祭ル断ハ其比出雲ノ神主出雲殿寺圖南ノ門人ナレハナリ 遊ニ叡山ニ詩ニ
二十年前讀書事再遊不識路ノ崔嵬トイフル句アリ又遊妙心寺ニ詩ニ
昔年曾見ル関山ノ月トイヘル句アリ 関山ハ妙心寺開基ノ号ナリ己ラノ詩ニテモ
叡山及ヒ妙心寺ニ居ラレシ事ハ明ナリ △伯巣カ顔ニ凡馬ナシ 順菴ノ才
徳モ異常ナリシヲ見ユ 白石 詩艸ノ自注ニ順菴ノ履歴ヲ著ス 稍是ヘタリ
○白石ノ傳ハ雲集ニ同門ノ姓名既傳 粗見ヘタリ
○白石ノ詩ハ白石詩草 白石餘稿 二ツノ集アリ 中略 ソノ詩高華雄渾
ニシテ片言隻語モ塞ク氣相ニ陟ルヿナシ大凡古今ノ詩人ヲ歴選シテ
ルニ窮愁孤獨ノ境ヲ離レテ富貴ノ相ヲ得タルハ此人ニ如ハナシ徂來ト
同時ニシテ少シ先進ナリ故ニ詩ハ此人ヨリ開ケタリト云ヒモ誣ルニアラス 中略
景ハ白石布衣ノ時順菴ノ門ニ入リ学成テ順菴ノ推挙ニヨツテ甲府ニ仕
フ程ナク甲府公入テ統ヲ継玉フ 文廟是ニ因テ大ニ 文廟ニ
信用セラル 文廟モ又素經世ニ志アリ車服官名ソノ外諸ノ制度ニ
至ルマテ頗メ其法定リ既ニ諸侯ノ朝禮モ車ニ乗シ衣冠ニテ禮
還アルヘキ由ニテ城中ニ先車寄ヲ造ラセ玉ヒ近年ノ内敷命下リヘカリ
ケルニヲ俄ニ 文廟薨シ玉ヒストナン然レモ 文廟ノ世ニ法シノ法
度文爲トカハレルハ皆白石ノ意ヨリ出タリ数ナラヌヿナレモ私ノ云
使ノ来ルヲ来聘ト唱ヘ来リシヲ来聘トシ或ハ代々ノ武家諸法度ニ
儒家ハ制外トアルヲ儒ヲ去テ醫師僧ニ家トニ改メ玉ヒ免類
メ如シ儀ニイカメシキ千千ノ氣ヲ去テ郁々タル文国ト定ルヘキヲハ

文廃ノ憂ヲ同ジ一発ニソノ功ヲ奏セシハ古ヘ遠慮ニアラスヤ余嘗ノ
信使一ノアレラヲモヲ作代リハ詰事大ニ別ニシテ饗礼ニモ雅楽ヲ用
ヒタニハリソノ白石蘆ノ蘆ノ茅語今ニ写本ニテ行ハル
○白石ノ弱冠ノ時ニ家父ニシテ眉ニ会シソノ頃行状陽軒トニモノ
眉ヲ多ク多ハ見ユ加シニ甚ヲ家ニテテ眉竹籟ヲ読ム陽軒モ凡庸
ノ人ニヤヲヤハ白石ノ未叡母ヒキ才智ヲ知リ今ヨリ以テ妻セテイフ白石ノ
曰ク吉ハ只眉ヲ語シカタニ来ンノニ彼ノ如キ翁夫ノ女ヲ娶ン(キニ非ト)テ
嘆ニ辞セラレタリトヨリ白石雖モ陽軒ノ附言ヲ見ルニアラハニ陽軒トハイワサレ
ヒ其事ヲ載ル古ヘ人ハ尤サセタン(キコトリ)
○白石ノ著述ノ眉多クアレヒ皆写本ニテ行ハル甚ヲ事雅ナヨキ眉ナリ是ニ来
接ニ錄ノ多リ是ニ示有用ノ眉ナリ且著ス数多キユヘ人毎ニ見ンコヲ得ズ(ル)国ニ曰蘭陵王入陣ノ曲ハ
假面ヲ被リ鐵鞭ヲ持テ入陣ノ勢ヲナセン舞ナリ正徳辛卯十月三日

カノ象雛僕ノ礼ニヨノ曲ヲ奏セサセタリニヒシニ私解ノ見ヲ附
ルハカノ手ニ持ルハ何物ヤ白石ノ答ニ笠帯ナリトイヘリヲ曲ノ由ヲ起ル所
ヲ知ラシテ打任ニ所謂左手ニ取ル簫ノ笠帯ナリト思ルヒ容者ノ先ニ
(ル)白石人トモガタリ(ン)ニ煙管ヲ出ヲ未座ニ及事ニテヲ面白ノ説話セラレタリトナン 副事
当ト思ヒヤラレタリ △居敬ノ枝(ル)儒ヲ諸侯ノ国ニ仕ルモノ
用意ニ教ヘ訓詁ノ頭向ニ備ルノミ
○無住ノ真迹軒ハ菅相ノ高弟ノ弟子ナリ(中略)ソノ学問ハ象山陽明ノ心
学ヲ出テ孤峰ナル学ヒニテ全体度量豁大ナルヨリソノ心法ノ正シキヒモ
繋縛セラレス且経術ニ精シク物理ニ通達セリ物ヲ指シ名ヲ立ル儒ヲ及ヒ所ニラス集
第ハ自ラ書ヲ外ニ著ス所ニ著ス雑著ヲ見テ知ルヘシ又大学術義トイフ
眉ヲ見ルニ眉ハ大学ノ中ノ治国平天下ノ別義ニテ国天下ノ治体ヲソ
説リ経眉ニ志ルモノ必見ルヘキ眉ナリ元来孫算ル心学ヲリ出タル学

風二而幸ニモ ケヤケキヘド 有シトコ
慶ス カラス 徂来看臺ノ経済ニモ暗ニ息(ヤス)来(ラ)事ガ 云ヲ聞セシコニ
見ヘタリ ヲガ友ニ岡山ニ遊(アソ)ビシモノアリ其物語ニ岡山ノ寺院ヲ見ルニ息
遮斬ノ次ノ石塔ハ賤シキ農工商ニ至ル迄ラズ ヒラ男子サヘ有
大ニ即(スナハ)チ何ヲ埔(ホ)ヤ中ニ墓トシルシ婦人サヘ然(シカ)ヤリ 於(オ)テ 猶(ナホ)ヤ
トゾ 世話(セワ)ニ談(カタ)ラレシ 為(タメ)ニ初(ハジメ)テ寺社ヲ破壊シ 名(ナ)ヲ去ニ譲(ユヅ)リ
然(シカ)レバシヲ見テソノ外ノ功ヲ慶スベヤカラズ 徂来ノ言モ 尚(ナホ)ヘ仁商人ヲ
体ヲヨク知テ 印(シルシ)ヲ 雑(ゾンバ)アルベヤカラズ
ヘ無(ナ)ク 篠子ヘ碌ニ取ニ足ズトイヘリ 其
○蕪村(ブソン)モト 近江ノ人ニテ 京花屋(ハナヤ)ノ一條通ニ住(スミ)テ有名ナル男子ナリ 其
時(トキ)ニ 竹(タケ)轎(カゴ)ニ乗(ノ)テ 江(エ)ヘ下(クダ)ル 京ニ到(イタ)ラン 其(ソノ)道(ミチ)ヲ 轎夫(カゴカキ)ニ
向(ムカ)テ 性善良(ショウゼンリョウ)ナル能(ヨク)ノ変(ヘン)ヲ 談話(ハナシ)セラレケレバ 心(ココロ)ヤキ 轎(カゴ)ヲモ 投(ナゲ)ヤリ悦(ヨロコ)ビ
シトナリ 真徳(シンドク)ノ如キニ至(イタ)ラン 学(マナ)ビ得(エ)ルナリ

学風今ハ一向慶(スサ)シカラズ 諸侯ノ国モ二代三代ニ家学(カガク)ヲ
継(ツ)テコノ流ヲ主張(シュチョウ)スル人ニ キヽ及(オヨ)ビコトニ 門風(モンプウ)実学(ジツガク)ナリ
軽薄(ケイハク)ノ徒(ト)ニ 堕(オト)シ 彼(カノ)ヒ是(コレ)ヲ善(ヨ)トスルニ 象山文集(ショウザンブンシュウ) 王陽(オウヨウ)明(メイ)ノ伝習
録(デンシュウロク)ヲ出(イ)テ其(ソノ)ニ家(カ)ニテ 秘(ヒ)ス 宮本(ミヤモト)多(オホ)ク有(アリ)ソレヲ逐(オ)ヒ
○山崎闇斎(ヤマザキアンサイ) 孔孟程朱(コウモウテイシュ)ノ道(ミチ)ノ正道(セイドウ)ニシテ 仏(ブツ)ノ正道(セイドウ)ニアラサルヲ
覚(サト)リ還俗(ゲンゾク)シテ 儒(ジュ)ニ帰(キ)シ 其(ソノ)後(ノチ)又 惟一(ユイイツ)ノ神道(シントウ)ヲ主張(シュチョウ)スル 前(マヘ)ニ見(ミエ)タリ
唯(タヾ)ヒ 学(マナビ)ニ 儒(ジュ)ヒノ大ニ益(エキ)アリシ 伊勢流(イセリュウ)ノ神道(シントウ)ヲ出(イ)ニ 延佳(ノブヨシ)
正親町(オホギマチ)殿(ドノ)ニ 学(マナビ)タリ 闇斎(アンサイ)ノ門人(モンジン)ニテ 神道(シントウ)ヲ撰述(センジュツ)
シテ 進メタレバ 正親町(オホギマチ)ヲ 尽(ツク)シ
ヲ見タニヒテ曰(イハク) 皆(ミナ)ヒ 豎子(ジュシ)ナン 古(イニシヘ)ノ
家(イヘ)ヲ 称(ショウ)シテ 妄(ミダリ)ニ人ニ示(シメ)スコト ナカレトソコヲ 商商(アキナヒ)ノ神道(シントウ)ヲ 正親町
流(リュウ)ノ神道(シントウ)ト称(ショウ)スル故(ユエ)ニ 今(イマ)モ 老(オヒ)ノ門(モン)ニ入(イル)ヘカラズ
カノ風水(フウスイ)ノ中(ナカ)ヲ 彼(カノ)ヒ者(モノ)碁(ゴ)酒(シュ)ニ 酔(ヱヒ)テ 天人(テンニン)唯一(ユイイツ)ノ伝(デン)

土金ノ傳ナト、イヘル類ノ古ミナン（シ）奥ノ舊庫ナドニ藏（カク）シ置（オ）ケリ

○三宅氏ノ家ニ奇話アリ最初三宅氏學成テ出テ阿部侯ニ仕（用人役）ヘ轉役シテ世子ノ傅トナル時ニ世子弱冠ニシテ時々菖蒲園ノ花街ニ遊フ三宅氏數々諫シ且世子ノ近侍中モ聞入レサルニハス且世子ノ門人アリ其時カノ門生二人ヲ遣シテ白ク吾師數々諫ヘ入レラレス世子ヨキヽヲハス剩ヘ書ヲモテ花街ニ往（ユキ）玉フ是義ニ於テ甚安カラス是ニ因テ臣名ヲ書シ厚ク諫メ奉ラント欲シテ書ヲ草シ了リソノ須臾ニ殿下ニ謁シ見ントスル比殿下三宅氏モ厚ク諫メ給ヒシモノヽ大故有テモ容易ニ放逐シ難シ故ヲ以テ三宅氏モ亦出テサセラレス偽リ忌ニ蟄居セシム中暑三宅氏ノ傳リ述作ノ柔祀来格説ノ初メニ山岩中官兵衛カ撰セル小傳アリ無論此事ノ始末ハ諱テ不載

○三宅丹治　京師好怪（ハイカイ）宅（タク）ニ住セリ

○ハ見重侯ノ家ニ若林新七ナルモノアリ能ク見ノ道統ヲ継テ邸ヲ一方ニ建リアル時濃州北縣ニテ昼ヲ講ス北縣ニ野狐アリ之ヲ祓（ハラ）ヒ祈（イノ）リ之ヲ止ム数百年ヲ歴テ妖術ヲナシ又殿医ノ方ヲ知レル狐野ノ民廃アルヲ以テ主方ヲ與ヘ昼ヲ若不治ノ症ヲ治ス其野狐一人ノ老翁ト変シ来テ日ク講筵ニ侍リ面部ニ黒子多シ人ノ吾顔色ヲ見ルコヲ欲セサル様子ヲ以テ新七ハ講後コヽニ坐ヲ與（ユル）セリトナシ字鶴トイヘル狸ノ一人口ニ膿（ウミ）多シ宮守モ今侍リ之リ云々ノ数ナリ

○若林新七アルハ祇園祠ニ詣シテ和歌ヲ詠スルノ歌二千早振神性（カミサ）タケキアラカ子ノツヽシミノ傳ノ意ヲ以テヨメルナリ瑞籬ニ彼家ノ主金

○京師醫学ノ傳来昭代ニ至テ初メ素問霊枢ヲ講スル人ナカリシ
ニ饗庭(アイバ)東菴 経脉発揮ノ作者ナリ 首トシテ素難ヲ講シ其門人味岡三伯ニ至テ
愈盛ニナリ三伯ノ高弟井原道閲浅井周伯小川朔菴岡本一抱子
四人ナリ一抱子ハ楊梅瘡ヲ療ルノ有ケルユヘ三伯師弟ノ約ヲ絶セリ
道閲ハ没後ソノ統ヲ受ル人ナクシテ知ルモノ寡シ今ニ道閲流ノ銅
人形トテニシニ残レリ周伯ノ家ハ其子孫今ニ業ヲ受ク朔菴ハ堀元
厚ニ傳ヘ元厚ハソノ義子元昌ニ傳ヘ元昌物故シテ嗣子幼弱ナルヲ
以テ暫ク門衰ヘタリ芳村恂益ハ玄醫ノ高第ニテコノ門ヨリ起レル
ニ非ズコレラノ人ヽハ皆自ラ刀圭ヲ取テ人ヲ療治セル流ニ非ズ但素難
ヨリ宋元明ノ醫書ヲ講スルヲ業トセリ古林見宜中山三柳北山寿
安名古屋玄醫香月牛山等ノ人ヽハ学問ニシテ治療ヲ専ニセルモ
ノナリ述作ノ書ヲ見ルニモ学問ヲ専ニセルト治療ヲ要トセルト體裁
同シカラズ近時ノ古方家ハ又大ニ格別ノ事ナリ一ヽニ挙ルニ暇アラス亦

皆成書アリ就テ見ルベシ
○伊藤仁斎先生初ノ名ハ維貞(コレサダ)時ニ兵部大輔良衡(ヨシヒラ)朝臣ナル人ア
リ其名ヲ避テ維楨ト改ム元禄年中仁斎ノ名 天聴ニ達シソノ
文ヲ上覧アラント云時コノ人ニ因テ文章ヲ献セシコトナリ
○仁斎ハ病ヲ療テ物故セリソノ時誰ニカアリケン一人ノ医者古義
ヲ用ヒタリソノ頃ノ評判ニ仁斎ノ手ニ過タリトイヘリトソ今ヲ以テ見レハ昔
事ノ如キハ平和ノ剤ナレモソノ時節ハコノ評アルモコトハリナリソノ後後
藤佐市ナルモノ古方ヲ唱ヘシヨリ醫道一変シ人ヽ一家ノ言ロヲ建
テ門戸ヲ張ル故ニ今ニ在テハ古方ヲ好ニサル人モ大黄石膏ヲ恐レヌ
ナシ時世ノ流行何レヲ是トシ何レヲ非トセシヤ聖人復出ズンハソノ
論一定シカタカルヘシ ○仁斎ハ平生寫字ヲ好ナレモ只意ニマカセテ
揮写シ法帖ヲ摹スル事少ナシ東崖ハ暇アレハ法帖ヲ寫ニテ閑ヲ
消セリトソ父子ノ間ニモ好尚ハ各異ナルモノナリ 以下仁斎ト東崖ト性

贈ニ違アリ仁斎ハ一篇ノ文一首ノ詩ヲ作リテ人ニ示サルニソノ人賞
歎ヲナサセズアナガチニソノヨロコビヲモトメズ仁人イヤヤウニ漢ノ美ヲナスホ
トイニモ自ラ心ニ満サレハ其顔色ヲ和ラゲ東星ハ然ラズ或ハ文ヲ
託ノ外ニテ書ヲ乞ヒ人ノ自ラモ喜ビテ其色ヲ面ニアラハシタリトソコレ仁斎ハ
大量ヲコレテ人ノ毀誉ニカヽワラズ東星ハ萬実ニレテ人ヲ信ズレバ
トリ云先生共ニ是ナリ
○仁斎ノ学脈ハ雍也記ノ標ノ記吉斎漫録ノ説ヲ綜ベテ吾斎ノ説ヲ
以トシ二家ヲ建タルモノナリト云説アリコレ尤全体然ルヘケレ
天地一元気ノ説ハ少シ仏ノヤウノアレ尤全体然ルヘケレ
三昏ハ管理学者流ノ言ニテ仁斎ノ説ト大ニ同カラズ長門ノ周南
カ之集ニソノ言ヲ論ゼルモ亦ヨロシカラン東涯ハ仁斎ノ
人ノ小ヲ攀駁セントモノ近時甚多シ慎ムヘシ
仁斎ノ自撰人ノ説ヲ窺ヒ
スルトアラハ千載ノ子雲トイフヘシ
○仁斎四感アレハ和歌ヲ詠ス其実行状ニ見エタリソノ詠出ス和歌ヲ
自ラアツメテ一巻トナシ且ラ「自点ヲ加ヘ跋ヲ撰ス真蹟ハ京師ノ稜
堂ニ在リ数馬氏ノ家ニ蔵ストイヘリ其本ニハコレリ其本ニ点ノ
歌七首アリ三ノ悼妻ノ歌ハ一首モナシ仁斎ノ
私歌トテ人ニシレシハ春ノ歌ノ中ニ梅ヲ詠ルト斯民也三代之存ニ
以直道而行也トイフ心ヲ詠ルト二首ナリコノ二首モ集中ニ入リ然レハ
コノ二首ヲ秀歌トイフニハ非ス隋ニ集中ニ考ヘハ牧子ノ一首ノ
先生モ和歌ヲ解セリ文集ニ和歌集ヲモ合刻セリ近頃南轅モ和
カ和歌ヲ解セリト云ヘル太宰カ獨語ニイヘリ但来ノ歌ハ所
謂ノ
○但来ノ辞名ニ四端ノ端ヲ以テ一端ノ端ナリトイヘリ然レハ之但来ノ言
ニアラズ仁斎ノ中年ノ見ヲシテシカ一シ仁斎晩年定メテ

端本ト云ヘル者考ル所アリ
○上略 仁斎二男長英字ハ重蔵梅宇ト号ス初メ周防ノ徳山毛利侯ニ仕ヘ
後備後ノ福山阿部伊勢侯ニ仕フ。三男長衡字ハ正蔵介亭ト号ス高槻
ノ永井飛騨侯ニ仕フ四男長準字ハ平蔵竹里ト号ス築（一本蒻）ノ久
留米有馬玄蕃侯ニ仕フ五男長堅字ハ才蔵蘭嵎ト号ス紀伊公ニ
仕フ下略
○京師ハ浪華落城ノ後浪人多ク徘徊セシ時双刀ヲ佩ルモノハ穿議
甚シカリシナリ今モ其先例ニテ士タルモノハ住居難キノミナラス逆旅
一宿信宿モ帯刀ノモノヲ好ニセサルナリ故ニ儒士ノ京ニ住スル輩ハモシ諸
侯ノ臣タルモノハソノ侯ノ邸ヨリ官ニコトハリ又何レノ諸侯ノ
臣ニテモナキモノハ諸王公家ノ寄客トナリテ刀ヲ帯スル也然ルニ
何レノ諸侯ノ臣ニテモナク又堂上ノ家ノ扶持ニテモナクシテ双刀ヲ
佩ルハ仁斎ノ家バカリナリ故ニ今ノ仲蔵（仁斎ノ孫）従年以来東崖ノ集

変ヲ通ヲ江府ニ献セシ時 教金有テ白銀ヲ賜ハリツ時ノ端書
ニモ浪人仲蔵ヘト署シタニアリトナリ
○丹波ノ山中ニ天狗ノ子ト云伝ヘタル処隠シアリモシ其事ニ家ヲ構シ
ハサニクノ祟ヲナス 伊藤ノ門人~~[illegible]~~ノ年少客気ノ因循ニテソ
地ニ家ヲ建タリ果メシテ夜々鳴動ヲナシテ一日モタヘ不安東崖
丹波ヘユカレシ時其家ノ寓居ノ地モナカリケレド東崖ニハソノ由ヲカタラズ
ニヒテカノ空宅ニ僑居セシムル然レトモ其夜ヨリ天狗鳴テ害ヲナサス 文略
○東崖ノ聚燭談ノ序ノ原稿ハ徂徠ノ文ニ助語ヲ加ヘテ助字ヲ
用ユルノ法ヲ示シタルモノナリト聞リ今刊行ノ序ハソノ後撰文ニ改
メラレシト見ユ
○仁斎初メ細川侯ヨリ百口米ヲ以テ聘セラル親ノ疾ニ因テ辞シ
テユカズ東崖ハ紀伊公ヨリ五百石ヲ以テカカルコレ又辞シテ仕ヘス
ニ東ニ父子氏ニ仕ヘヲ欲セサルナリ

○東崖ノ児夭死ノ時門人木村源之進僧ニ為ル第ノ了源之進ハ江戸
ノ産ニテ多年東崖ニ随侍シ後ニ儒ヲ以テ紀州ニ仕せり
○徂徠先生俗名ヲ總右衛門ト称セシハ曾祖父ノ名ヲ襲（ツグ）ナリ荻生
相目トイヘルモノ初テ参州ヨリ勢州ニ来リ北畠（皇カ）ニ家ニ寄（ヤドリ）テ卒ス其子ヲ
總右衛門トイヘリ即曾祖父ナリ祖父ヲ玄甫トイフ初テ江戸ニ之テ醫
ヲ業トセリ父方菴（字ハ宗甫）継テ醫ヲ業トシ東都ニ仕ヘ禄二百石ヲ食（メ）
リ時ニ　憲廟ヲ舘林ニ命アリ　春命有テ方菴ヲ以テ侍
醫トス甚好　憲廟出テ封邸ニ就クニ比方菴モ従テ仕ヘ奉リ
シカシ一家ニ陪臣トナルヲ口惜ク思ヒ依テ幕府ニ帰ル程ナク
憲廟入テ統ヲ継クニ比方菴カ公ニ従カハサルヲ不臣ナリトテ父子氏ニ
江戸ヲ放逐せらん コノ時徂徠父年十四才父ト共ニ上總ニ之テ氣毎
カ豪ヲ頼ミテ長（ヒトゝ）ナリ二十五ノ歳赦ニ逢テ江戸ニ帰ル最初リ増上
寺ノ僧ニ父ノ方外ノ友アリコノ時僧臘一字（イチモン）斑ナリシテ頼ミテ従ヲ

集メテ舌耕スソノ頃柳澤侯ノ邸甚ニアヒテノ終ニ侯ニ仕ヘ禄ハ五百
石格ハ番帥（バンガシラ）ニ至ル弟ノ總七ハ又コノ侯ノ推挙ニ因テ東都ニ仕ヘ
禄二百石ヲ食リ
十二
○徂徠ノ号ハ總州ニ徂徠（ユキ）ノ里トイヘルアリソノ地名ヲ以テ号トセリト
○徂徠ハ總州ニテ田夫野老ノ中ニ長（ヒトゝナ）リシユヘ平生ノ言語ニモ鄙野
ノ俗語多カリシトナン郡山ノ柳沢権大夫ノ著述ニ之ヘタリ二爽（ゲニ）モ譯
文筌蹄政談等ノ書ヲミルニ賤シキ俗語ヲ能アワカハシタル多ク見
○徂徠萱園ノ内程法極テ嚴正ナル語アリ　下略
○唐後太子字萱歩ノ号ハ以テ命シタル書　贈餘雑録ニアリ徂徠物
茂ヲ罵せん所由ハ廉景山ニ答ヘン書牘ニ見ヘタリ
○徂徠名ハ双松ソノ頃　憲廟ノ世子徳松君トイヘルアリ早世ヲ為ニ
ヘリソノ諱ヲ避テ字ヲ以テ茂卿ト称せり春臺ニ文集ニ墓誌ノ文アリ

碑銘ハ特蘭ノ戻ノ撰ナリ左ニ録ス（墨）
ア忠統字ハ大乾号ハ特蘭幸多伊豫戻ナリ（墨）
リ故ニ西墓ト称ス後封ヲ勢州神戸ニ移ス孺ヲ経テ多政ニ至リ
タニ（墨）リ
○但木ト東屋ト時ヲ同フシテ互ニ学術ヲ（墨中）講ジ互ニ師友
皆ヲ君ヲ以テ但木ノ学風ヲ悦ブノ本屋ノ後裔ニ非ス但木ノ学風ヲ悦（墨）
トハヤリイ（墨）リ二家ノ優劣コレヲモ知（墨）シ学問ノ造詣見識ノ大小ハ姑
ク置ク人トナリノ二点ヌルト徳ノ君子キハ（墨下）
同ジキ本屋ニ於テ随侍シ久ン（墨）人ナリ其言ヲ聞（墨下）ニ曰
同ジキ本屋ニ於テ随侍シ久ン人ナリ其言ヲ聞ニ曰
○但木兵学ヲ以テ一家ヲ立テ録二十三巻ヲ撰ス即一家ノ兵法
ヲ述ベテ又孫子呉子ノ国字解ヲ作ル孫子ハ世ニ行ハル
○神祖ノ制但木ハ古法ニ非ス制ヲ離（墨）用ユ本屋ハ唐ノ六典ニ擬（墨）ス本屋ノ
説是ニ従リ但木ハ主体ノ学術ハ儒ヨリ出ル故ニ結（墨）ノ制度

ニ多ク此制ヲ引用ス（墨）リ但木ノ説ハ（墨）
ニ出ヅ（墨）リ
○南部ハモト東人ニテ父ハ小國氏ナリ（墨）
兄弟モ有ケレトモ父ヲ美卿ト
後師ノ書ヲ半ニ六ト云モノハ美子ノ門人ニテ和歌ヲ
ニ住ス後住ヲ辞シテ南部ハ江戸ニ之テ梅渓ニ
入江幸ハトイ（墨）リ妙名ヲ喜ンテ
い南部物編ニ拠ノ當田ノ入江若水ニ與ヘ（墨）
中略 鐘情集トイ（墨）ヘルハ南部
リ（墨）コノ児英才ナリシト見エ不幸ニ
○海在抗カ五廻雑ニ学者文人ニ多ク交テ
而シテ二巻ノ血脈ナド編シトシテ今ニ傳ヘルノミニテハ絶
ハン（墨）ヲ希ヒ古代ニ始リ四通リ百五十年来ヨリ當今ノ学者ヲ

こし又子孫ノ存スルモノ寡シ但来ハ姪ヲ養ヒ妻ニ養ハ他姓ヲ子トシ而
高ハ実子アリツレ氏不幸ニシテ遂ニ佗姓ヲ養ヒ東野菌斎亭モ
子ナシ但来門ノ下ノ傑出ノ中ニ二実子ニテ嗣ル人ハ山縣少助一人ニ限リ
三輪善蔵九モノ此人初ハ直方ノ門人ナリ後王陽明ノ心学ニ入レリ山崎闇斎及ヒ其門ノ下ノ人
皆嗣ノ絶ルヲ見テソノ論ヲ著セリ然レ氏善蔵モ子ナカリシトナシ
実ニモ闇斎及ヒ門人渉見安正佐藤直方三宅重固遊佐木斎
十ト皆嗣絶タリ其末々ノ門人ニ至テモ或ハ子ナク或ハ偶有テモ多
クハ不才子放蕩子ニテ家声ヲ墜セリ只古今ニ希ニシテ布衣ニテ
三世ヲ経テシカモ家学ヲ相承セルモノハ伊藤仁斎一人ナリソノ雖後
内ノ学者嗣ノ絶タルモノ多シ豈天道モ知ラナキカ獨天意ニ背リ
乎アルカ或ハ謝在抗カ論スル所ノ如クナルカ懼ルヘシ敬シムヘシ
○肥州ニ水足平之ムルトイフモノアリキ即但来方集ニ所謂西肥ノ水
秀才是ナリ十六歳ニテ但来ヘ書簡ヲヨセテ経義ヲ問フ識ニ奇童ニ

アル時肥州一物ノ人アリ但来于鱗ノ華山ノ記ヲ出シテ日ハ己ヲ携ヘ
物テ秀水才ニ示シ訓点句読ヲ付サセヨモシ之トコロニ事ヲ成サバ其
賞トシテ書隻耳ヲ殺テ秀才ニ與ントゾ下略
○山岡大佐ハ山岡宗圓トイヘル東都ノ留居ノ子ナリ風慧ノキコヘアリ享保
九年甲辰七月年十三ニシテ徴レテ博士ノ職ニ備リ称二万名ヲ賜
ハル熙朝文苑ニソノ時ノ上表一篇ヲ載タリ又廿護園名公四席ニ
但来及ヒ諸子ノ贈序アリ二十四ニシテ歴ヲ廃テ卒ス東庠文集
ニ墓碑ノ銘アリ最初徴ルヽ時諸参政ノ邸ニ於テノ試ラル其時
唐刻ノ書ヲ読ミ席上ニ詩ヲ賦セリ左ニ録ス六月廿一日水野壹
岐侯ノ邸ニテ国語旁訓ヲ読ム并ニ詩一首叩作登龍客君侯
有好顔董風高閣ノ上身似到蓬山ニ同廿四日松平能登侯ノ
邸ニテ潞史国語應制ヲヨミ并ニ詩一首君子退飯後高雲
錦席閑從容半日對愧少孔融才同廿五日石川近江侯ノ邸ニテ

三才圖會ヲヨミ并ニ詩一首氷簟玻璃盞華堂六月秋不才今日遇何以謝賢侯ニ同廿分大久保佐渡侯ノ邸ニテ通鑑綱目ヲヨミ并ニ詩一首侯門自古称如海童子何知御李君昭日鄉隣賀親去ラバ虛名都下早ク相聞ニ右十三歳ニシテ台聽ニ達シ試ミニル時ノ事ナリ

○京都ノ人ノ諺ニ宇野三平カ出テ歩行ト香川太沖カ病者ヲ治セルト谷左仲カ文章ヲ撰ルト此三ヲ見タル人ナシトイヘリ三平ハ多病ト国学トニ因テ実ニ閉戸先生ノ称アリ大沖ハ治療ヲモ能セリ然レ氏多クハ痼疾況ニ病ニ治ヲ求ルユヘ扁鵲奠公ガ術ニテモイカン氏シ難キヿアリ故ニ此名ヲ得タリ左仲ハ詩集并ニ論語ノ玉振録ナトヲ著セリ一雨雅ノ癖有テ字訓ニ刻意セル人ト見ユモト東崖ノ門人ニテ阿波ノ産ナリ

○宇野三平兄ハ永楽屋久右衛門ト云先祖ハ江ノ永原村人ニテ宇野姓ナリ今ニ永原ニ宇野姓多シ兄ハ聯歌ヲ好メリアル時雲雲ヲ雲ト見ル五月雨ノ晴乃哉トイヘル句ヲ得タリ一生ノ秀逸ナリ

○一ヲ勸メテ百ヲ勸ニスノ術

○京西ノ花街ノ名ヲ急原トイヘルヿハ肥州急原茂林ノ年今ノ地ニ移ス故ニ名ハケタリト蘭嵎ノ夜話ナリトナン嗚呼島原ノ民ハ一夫天主教ノ妖術ヲ倡テ園境コレニ惑ヒ終ニ是カ為ニ身ヲ没ス京西ノ花街ハ艶色ヲ以テ士民ヲタブラカシイカナル剛腸ノ人モ一タヒ至レハ多クハ身ヲ亡ス急原ノ名誠ニ當レリ

○台廣ノ諡号尚書ノ禹貢ニ本ツク台ハ我ナリコノ時ハ延知切ニテ夷ノ音ナリシカルヲ胎ノ音ニヨメルハ初メ林ニ氣ノ人ヽノヨミ違ヘタルカ例トナリテ誤ヲ襲ヘルナリト友人伊藤希卿師説ナルヨシ物語リセリ此類ノヿ世上ニ尚多カルヘシ

○予昔ヲ評スルヿヲ好ム故ニ古今ノ法帖和漢雅俗ノ真蹟昔論等

ノ眉ヲ看ルヲ好ム五国五十年来眉ノ道大ニ行ハル然レ共多クハ
賤（せん）ナル芸ニ従事ス士大夫ハ之ヲ学ブヲ屑（いさぎよ）シトセス自ラ写スコトニ
ヤフく云ヒ人ノ奴隷ニテ加ル二倍セリ況ヤソノ筆ヲヤ只其論ヤ高
キハ但未ダ文集ニ見ルヲ聞カス只眉中ニ書アリトイフノミ
○眉家ノ眉ニハ俗態多シ学ブ者ニシテ法帖ヲ触学（ふれまな）ヒ名モノハ眉
ニハ古気多シ
○近時ノ眉家ノ中ニ京都ノ菜原蒼渓東ノ南岳大眉ヲ善クス
江戸ノ眉家ノ中ニハ平林正五高芙蓉第一ストスルナリ
○那波道圓ノ説ニ揚州ノ商カ白ニ日ノ山姥ニ西施破瓜ノ年ノ破瓜ト山
十六家ヲイフ其故ハ瓜ノ字ヲ二ツニ分テハ八ト八ト十六ト成ル故ニ十六
ヲ破瓜トイフト易経ニ但未ダ破根ノ義トノミ意得ラレ
ユヘ保草（ほそ）ノ之改ノ註ニ顔ノ美ヲ形容シテ太子破瓜像ト曰（いへ）ルヲ大ニ笑
ハレタリトイヘリソノ故ハ破瓜ヲ女子ノ破根ノ義ヲ出（いだ）シテ女子ノ十
六歳ヲイフハ誤レリ道家ノ説ハ更ニ仙女ノ中ニモ廿（にじふ）モ（ママ）ハ一聖ニ泥（なづ）マ
ス一キワヤラシカラヌ一ツノ破瓜トハカイタンコトニシテ多ク破
瓜ヲ十六歳トイフハ誤レリトイヘリ
○五代国宴長安ノ陂池ノ兵戈ノ餘ニテ学問ノ道大ニ衰フ帝ノ中ニ
四眉ノ素養アル人モ甚タ少カリシトイフソ須臾窩（しばらくか）モ人学ヲ
講シ修世ヲ倡フル人ニ豪傑多ク出ツ中ニ異（こと）ニ其時代ノ兵乱ノ中ニテ甚
眉ニ志シ先生ヲ求テ学ヒ十八史略ヲ見ント欲スレ共ヲ眉ヲ持ル人ハ十
ニ一ナリ後ニ南倉興市ヲ訪（たづ）ネ静（しづか）ニソノ借出シ借写セシレトモ又眉籍
林道春ノ貴求メラレシ由ヲ聞テ又ハシ再三眉ヲ以テ借シ出シ一ヶ月
ヲシレトモソノ変ナシレト俗ニテ終ニ贋（かり）サリシレトナリコノ二事ヲ見テ眉籍
ノ不自由ナリシ想ヒヤラルヽナリ下暑 圖眉編性後ノ条ハ老人夜話ト
見一ナリ

○四十六年末二枚行せん眉籍ノ内ニ大ニ行ハレ免ス（逝）ニ及ヲモ十
シ原枚享保九年甲寅四月再枚寛保三年癸亥四月三枚延
享三年丙寅四枚宝暦十一年辛巳
五月六枚明和三年丙戌三月此後ヲ試ント欲ス（朱標注云明和六年己丑正月七枚ハ枚安永四乙未年正月九枚天明三年癸卯六年己巳正月七枚ハ枚安永四乙未年正月壬寅正月）
○大阪二五井蒲五郎ト云人儒士アリキ宋学ニヲ眉ヲ善セリ此物
論一万巻ヲ修ム但未ダ一言モ発セリト云ヒ大
業ナリ
○呂物ノ初メ吐（ここ）ノ民祖ヨリ封号ヲ受ケテ彼方ノ枚ニヲ眉行務ヲ慶世ラレ名ヲ
ヲ送リテ彼方ノ枚ニヲ眉行務ヲ慶世ラレ名ヲ下賞ヲ顧野玉
玉葡ヲ見ル即ヲ物ナリヲノ外モ尚ア（シ籍ニ顧クハ今モ華船ニ託
シテ（徂来物ヲ）ナリ
○徂来一再ニシヲ責ム遠シハ遇ヲ隣
手子和オヲ特ヲ旅舘ナリ

深ニ服スシカシ其行跡ヲモトリ如シ但未ダ見ヲ性ヲトシテ
トガメス人或ハ徂未ニ言ニテ曰先生何ソ又子ヲ妻ガンヤ徂未答ヲ
曰カ六千里ノ駒ヲ得ヲ度ニコレヲ乗ラント欲ス（ヲ）ナリ聡ラクハ逸セン石帯ノ待者
ニハ継キ難シトリ後ヤ、節ヲ折ル如シ（ヲ）但未ダ天性狷者ノ風アリト見エ
○平子木宇山侯ニ仕ヘ五月五日ノ朝ヲ門ノ服ヲ着ヲ象ヲ詰
○東野春斎ノ一両人初メハ中野林逸ノ門人ナリ後ニ徂来ヲ学
ヲ称シテ或ハ竹人トイヒ或ハ
○石川丈山（中葉）撃ノ中ハ竹人トイヒ或ハ竹人ト云ヒ
○隆草ノ文政十八年ニ法華律ニヲ信ヲ詰ヲ好ヲ歌集ヲ写ヲ行ハル母
リ竹山集谷口集アリ又和歌ヲ好ヲ歌集ヲ写ヲ行ハル母
ニ事ニテ終ヲ身ナリシトナン書未事ヲ巧ニセリ和歌集ヲ写ヲ行ハル母
ヲ著スハいたニ常リ
○元政ハ俗姓ヲ石井ヲ（草）氏ニノ子ヲ根ノ大夫石井半二半ノ弟ナリ射藝ヲ能ク

十九歳ノトキ出家ス深草三ノ歌アリ曰ク三ノヤハ雨降モ折シノアハレヲミムル深草ノ里元政集中ノ秀逸ナリ

○多ク古良ノ荘一色トイヘル皆多ク仏菴ニ出リ其中ニ年ヲ徂来ノ家ニ之ルアリアル年徂来卽チ萬歳楽ノ三字ヲ扁シテ與フ今モ表装シテ家珍トストナン

○長崎ニ雪山トイフル人アリ扁ヲ善セリ善機ノ弟子ニテ廣陵ナトノ師ナリ初メ多賀ニテ甚シク屋漏レテ雨漏ル牀盤ヲ高ク頓リ其下ニ坐シテ看ヲ學ベリトナン後暫ク江戸ニ之テ寓居セリアル時多侯津侯見ヘ全ク片ヲ求メ舩五六艘ノ蝦ヲ買ヒ行ツリト上来ヲ署シ扁ス其人大ムネ此類ナリ而ノ後物有セリ廣陵ナル

薇字様ニ肖像アリ

○廣陵ハ京西嵯峨ニ棲ミ寓ス古道トイフルアリコレモ嵯峨ノ名所ナリ号ス藝ニ達シ所向ノ等術ニ精シク多能ナル人ナリ号ヲ高シ

○上署 近代ノ篆扁ニ時ヲ以テ名ヲセル人アリサキニ江戸ニ池永道雲初メ布右衛門ト称ス後ニ隠岳ニテ道雲トイフ後ニ十九篆ノ扁ヲ見ルニ印譜ヲホメタニヒシテアリ藏ル人アリ但来之集及ヒ廣陵ノ篆法従文ノミニカハラス古今諸家ノ篆體ヲニシ雪山一原ナルモノアリ長崎ニテ印ヨリ篆ヲ學ヒ七長ニテ益ヒ筆法ヲ則トス老後ニ素篆ノミヲナラス自運ヲモ離レタリ従ノ文ニ刻シセシメタルハ自若タリ又默隠佚山ナドモ艮華ノ秦ヲ篆ヲ能シ明ノ趙宧光カ従文長篆ヲ專学ヒ論ラス佚山ハ玉ヲ彫ニ献セシテアリ二子ノ篆ヲミルニ淳ハ正ニシテ巧ナル所ヲ篆扁ノミヲ以テ名ヲナセルハコノ三人ナリ廣陵モ篆ヲ奉リテ不載酒トイフル扁ヲ撰ニテ載ル古

今篆書ノ集大成ト称セラルト雖モ猶ホ遺憾ノ点ナキニアラス
森立之ノ考ニ依レハ之ヲ古文ト称シ然レトモ
篆多シトイヘトモ大篆ニ籀ノ字アリ小篆ヲ以テ補ヒ只篆法ヲ大篆
ノ体ニ写シ或ハ小篆ノ中ニ大篆ノ字ヲ入レ(字せん類ナリ又楷書ノ
偏旁ヲ以テ篆ノ字ホノ類ナリ近年江戸ノ
翹木篆ニ名アリ大篆ニ充ル巧ナリト見エ事煩瑣ノ篆ハカノ楷書
ニ同テ篆ヲ作シルモノ有テ誌トスルニ足ラス
○羌何勘ケ曰日本ノ儒者ハ皆ノ弟子ハ(し然ラサレハ衣食ニ乏クシテ
困窮ニ至ルトソレ故門人ニ阿迎新井白石ノ如キ
左右ヨリ奉事シ学ヲ講セリ但シ(れハ
○大坂ノ富家退菴【西墨】儒ヲ聘セリ但シ(れハ
儒ヲ聘トイヘトモ其ノ口ヲ供シカタシ故ニヤモスレハ逆ヲ拒ンニ至ルモ
ノ多シ皆ノ第ハ衣食ニ乏シカラス故ニ逆ヲ拒ルニ至ラストソ

○織田梅笑トイヘル士アリ詩ヲ私塾ニ講ス但シ私塾ハ三間瓶山ト此人ニ従テ軍学ニ長セリ就テ学ヒ
名ハ義倫字ハ子維トイフ軍学ハ又七町洞ノ街ヲ学ヘリトソ梅笑
弟子ナリ主君カ帰ハ但馬守ハ池田ノ学
衛門トイフモノアリ加地流ノ学
著ス但未ノ軍学ハコノ原右衛門ニ学ヒタルナリ
○中条正佐ハ仁斎ノ門人ナリ著撰ヲ講ス
ニ集註ヲ以テス二家ノ説ヲ中条
点ノ四君トテ今ニ傳ヘリ正佐カツイテイヘルハ善導大河ノ急傾ノ
功徳ニ回テ口中ヨリ阿弥陀ヲ吹出サレタリトイフ古ハ陰徳ノ
ニ回テ借宅ヲ三軒吹出シタリト今ノ論語ノ古義ハ大ノ校
正ナリトイフ文字誤写多シ
講義シキリテ耳ニ入レ終ニ解ヲ得ル

トナス今ノ良佐ハソノ義子ナリ
○伊藤宗恕ハ伊藤丹後守孫ナリ丹後守ハ豊臣氏ニ仕ヘ大坂役
ヨリ以前ニ卒スソノ子ヲ伊藤宗淳ト云是ヨリ京都新在家ニ住
セリ宗恕初メテ越前侯ニ仕ヘ禄千石ヲ賜ヒ在京セリコレ越前
侯五十萬石ノ時ナリ宗恕ノ妻ハ京都ノ富商曲直瀬（十世）某安院
ノ女ナリ但未ノ時名高カリシ越前ニ夢ノ但ナリ此時紫安院ノ議偶
アリ又宗恕声名ハ頗ル甚ナリシ是ニヨリ宗恕ヲ越前侯ヘ護スル
者アリ紫安院推挙ニテ京都ノ学職ニ擢テラレシコトヲ辞セント
時ノ越前侯ハ今世ニ称スル前ノ翁公ニテ心剛ナル人ナリシカバ大ニ
震怒シ宗恕ヲ越前ヘ召ビテ幽閉セシムルコト三年ナリ死セント欲スル
カドモ叶ハズコトナレバ三年ノ後何事モナク職ニ復セシム宗恕京ニ帰
リ門人ニ語テ曰学文ハ人ノナサテカナワヌコトナリ余三年禁酒セラ
レテイヨイヨ学ニ入ノ有難キコトヲ知ル尋常ノ従業ナラバ三年ノ長キ

憂悶シ其中ニシテ病死モスベシ余ハ其間書ヲヨミ詩ヲ作リテ甚ダ
ノ禁酒ヲ忘レ居タリトゾ宗恕坦庵ト号ス仁斎村上友佺ナド
其比ノ書者ニテ三人交リ有篤シソノコトハ東崖文集三ニ見ヘタリ
宗恕ノ子孫モ相継テ越前侯ノ儒職ニテ京ニ住セリ二家ニ分レ禄アリ
テ吉耕斎授ヲ業トセズ故ニ今日世ハソノ名家ナルコトヲ知ル人
多シ
○江村宗具ハ中書作州ノ森美作侯ニ仕フ又ハ百五石ヲ給フ歳々歳
ニ満テ没ス村水尾帝在院ノ時良帝代ノ七寿ナルコトヲ聞召シ
ヒテカロテ修業ノ法ヲ問ヒ給ヒ鳩頭杖黄金壹枚ソノ外華侈ナトヲ
賜ル中書信モソノ大閤ノ世ヲ経テ昭代ニテ聡明ナル人ナリコノ翁
ノ卯年ヨリ見聞ノ事モノ語ヲ坦庵ノ記録シテ二巻ト成シ
人雑話ト名ツク其時ノ法乳世繁盛シトシテ尤実録ナリ
○芝蘭亭ヨリクワシ仙語ヲ見タルヲ手ハ久無シモ華ヤ今ロハムカラノ

岸ニ咲ト云ヒ如キハ詩ヲ併セ日性ニテ之ニ絶唱トイフヘシ
トコノ句ハ伊勢ノ乙由トイフルモノハ後ノ書ニ集リ世ニ行ハル
○近世諸儒ノ中著述ノ多キハ東涯ニ如ハ十カ(シ中略)凡既ニ刊セル
トイヘドモ刊セサルト合セテ四十餘部ニ及ヒ経義ノ
純粋ナル辨疑録古學指要ノ名物六帖ノ俚俗便ナル尽倩
ニ人品富財ニ等シト雖ドモ刊行シテ傳ハルコト行ハル(下略)但来ノ著述(下略)
事文集及學庸解ノ書(中略)後ニ皆目一巻一箱ニアリ(中略)但来ハ十ニ著述
ノ多キハ著書堂ヨリ白石鳩巣モ迭ニ皆世ニ行ハル中村惕斎皆数
次テ皆目ノ多キハ貝原萬信ヨリ著作ニアラス又ノ人ニシテ
多シ五経ノ筆記ト雖博ニシテ刊行ニ及シ惜シム(シ)閻斎モ亦皆
目少シトセス文會録ノ如キ抄皆ヨリ著作ニアラス又ノ人ニシテ
モ亦多シ中ニ就テ陳見ノ結獻遺言氏族辨正ト云
(シ)三ハモ丹治筆記甚多シトセス宇都宮由的ノ頗ル皆數十巻ア

リ若夫シ水戸ニ中納言光圀公ノ時ヨリ彰考館ヲ設ケ諸儒ヲ聘
召シテ撰著編選ヲ掌トラシム鎌倉志扶桑鐘銘集州郡志
参考古平記花押藪ノ數枚掌ニ暇アラス皆ヨリ又日本史數百巻アリ
列傳ヲ見ル議論平正引據精厳謂ツヘシ良ニシテ正ヨリト国初ノ
文敏文穆ニ公撰述大ニ信用ヲ余常ニ昭代ノ藝文ヲ誌シテ他日大
史ノ采擇ニ供セント欲ス志有テイマニ果サス
○吉蒿野ハ百五十年来多ノ學者ヲ出セル郷ナリサキニ三宅玄琳
ナルモノアリ老子會元ヲ著ス世ニ行ハル其後宇佐美直助ナルモノ林
家ノ門人ニテ大學ヲ講ス亦善ス前ニ出テ大學ヲ講ス亦善ス財ヲ善ス
ソノ頃江戸ニテ一ノ多ヲ富ヲ富ルモノ三人アリソノ一人ハ(脱)野商
前モ卯ニシテ其人ニ學ヲ受ケ後東崖ノ門ニ入レリ
○吉郷ニ小澤詢ナルアリ士ナリ(中略)死日子弟ヲシテ永誌シ且ツ
賦シ其風美ヲシテ筆受セシム其詩ニ曰ク十年踏破編中州ニ仗

枕帰家遇暮秋他日人如問遺稿絶無一紙一丸流ト誠ニ惜
ムヘシ

源平盛衰記抄

全

源平盛衰記圖會抄萃

張子房

謝膽

王凡哀以思。周道蕩無章。卜洛易隆替。興乱罔不亡。力政吞九鼎。
○夏寒浞秦趙高漢王莽梁周伊唐祿山三十先皇ノ政ニ隨ワズ民
間ノ愁ヲカヘリミズ我朝ニテハ第平ノ將門天慶ノ純友康和ノ義親平治
ノ信頼等ナリ○平姓ハ寛平元年五月十二日ニ賜フ○睡ルガ如ク終
焉セラル○清盛若年ノ時阿闍梨祐真ノ教ニテ大威德明王ノ法ヲ行ヒ
七箇年ニ滿ル夜明王示現アリテ和光ノ人ヲ知ルコトヲ得ベシ
花のさくぎ清くき聚もさのえん○却經○唐土八葉大臣爲ルハ天
下ニ聞ル賢臣ハ禾童ヲ多クソロヘテ金吾ト云トリヲモタセテ國ニ蒼ニ祈
徊サセテ萬民ノ愁歎ヲ天殊ニ奏セリトゾ○二條院ノ后清大寺大納言
公能ノ姫ナリ清涼殿ノ障子ニ近衛院イニタ初年ニテヲロシケル時カヽセラレタル
遠山ノ有明の月ヲミテ　思ひまやうきみなくしまめくるまきて回

雲井の月をこそとは〇櫻町中納言成範ノ 千手振あるへ人神
の梢ちりまてい花もよわむを出ぐるうれ〇徳ヲ以テ人ニ勝者ハ昌カヲ
以テ人ニ勝者ハ亡ブ〇家ノ瑕瑾〇和漢ノ才人風月ノ達者〇花
政修山見え花をつる所まて 遊木のその枝とも見えまさし様を
花をあらわまつるかし〇中納言時忠ハ堂山衆徒ニ被る其出
ノ詞ニ云 衆徒致濫惡者魔縁之所行 明王加制止者善逝
之加護 〇昼寝〇物性ゐ急ナル時ハ必狼藉多シ〇罪ノ重きハ捶フシ
卯ノ浅きハ重セヨ〇口解〇帝ガアレハコリ俗ノ也 〇再山宴本ハ其穢必
備〇空耳〇康頼 硫黄ゐ島ニ存 さはゆうと沖の小島やすまい
うなとと親まよ 断よいやものゆ風 思ひやれしばしとおもふ
旅たにもちかく結へるむまほしきものを〇便〇紫宸殿ノ東ノ脇
〇時ノ弟ヲカザシノハナニカザセ〇頼政辞世 埋木ノ花さくこと
もなかりしに身のなる果ぞあはれなりける〇若狭蓮會

秋昔ノ恥ヲ雪ズ畢ニ句践ノ雠ヲ復ス曹沫三戦ノ辱ニ死セズ臣魯
國ノ基ヲ報ズ〇方人〇富士ノ山ト尺ツラベ猫ノ額ノ毛ヲ嵐がうかがう〇
綾布〇清盛公は慈恵僧正の再来 観音卒都婆路ことぞゆきそろへ
大權の化現方便をめぐらし実業の元生我利益せんため清盛と哉
の名捨殺し生きる必意の理ヲ示シ給フニヤト覚タリ〇覚明ハモト
勧学院ノ文章博士 進士蔵人通廣トイフモノナリ出家シテ西乗坊信救 [進士蔵人道信救ト与南都興福寺ニ在テ頼政ヘノ返牒ヲ書ス]
ト改ム木曽義仲ヒテノチ親鸞上人ノ弟子トナリ信寂東国 祖師
トナリ西佛上人ト号ス〇後陣て迷臨 淨海 若葉あやしき様と
迷つしよ年をつみし袖もぬれまさる 〇鳳管絃講 伽陀
ノ役 方磬 式役 〇萩さる妻の伴 埋火の下にのとこてのぞむ
美し 〇通盛をと 故刑部卿憲方ノ娘上西門院ノ女房ニ ラクヤ
ケル 鳴あくる風のたよりもみえてしよもしまるの月ぞあゆお
まつの子〇便〇通盛をと 我恋ハ細谷川のまるきをしやて

こうえさまして　ぬるて　神の所　ふこゝのへも　谷のうち　侍深世
そとおもひしもまもめるて　神ぶ　○呼　重盛嬌男維盛　余多
まて　むまましていつゝ　志なくふことのこそ　定なき世子　定なりも
いまよ　○鳴呼ガニし　○能引　○真就失勢同蚯蚓　○秦始皇
後ヲ極レドモ驪山の墳ニ埋シ　漢ノ武帝命ヲ惜メ　杜陵ノ苔朽ス
上　色界ノ天衆ナヲ退没ノ愁ニ遇フ得道ノ羅漢スラ必滅ノ理ヲ見
ズ　○栄花名聞モ大宅ノ樂重職官位モ炎中ノ雪シ　○妻子
眷属ハ恩愛苦海ノ波ヲヲコシ　我執愛憎ハ邪見放逸ノ劔ヲ鋭
ル　縁逆縁ニ生死ノ妄染ナレバ自身他身三十火宅ノ炎ニシテ一切有
為ノ法ハ悉ク夢ノ如シ　○直岩木ニアラサレバ　○修因感果　○禪　○
古ヲ以テ石の色落くるもの青緑蘚宮を閉　名象道を埋ツメも
いつしの空くもりも小庵　町角　汗鶴ニ　苔ハ木葉乱ハ飛んて　庵の
孝逃ニ聞ヲ　あらしに侍ふ　穢の孝風ニ浴リ　雪の烟霧を　ゆ

月の新宮にあつまる　堂火も　もとに無常を志しけれ
○氣霧の快乐に羈さま　善々の終焉を知らまし　○神ま正
直の路に宿る　○静蘇桂現ノ前まて　風はる一曲　あまの
すさこのまゝ　現たかゝりきのあとも　恋しさに　かゝるくさ
なまし　面新を以川の世まのまゝ　まゝ別まのことに
悲しさを親のいつれ子のいつのまゝ　まくまゝ　かなしきを
婦さんのいつまなりけれ　○思ひしに　○いふ人のうへ　かゝ
ハ我身のうへ　○後指とさま　○蝸牛の角のあらそひも　かれ
肢の裏にこのしけ霧にはる花もさそふ　かしに雪
となる　○源平のこれをおとろへこれをさかゝる世をこの
なしこそ　西行法師をみましの　英若しこれにや　ゆゝ
野長明八月のけさむき外山に　かくれて　心ひを　方丈記に
のへ家隨ハ世をとし　天王なに捿て　沸の居代源さ定家

御のもしくれまる小倉の山にこそはしかなるとみな戦国
とよそにみて嵯子陵ノ陵瀬に詣するおこそひなりけり
○土西門院ノ女房ニテ有刑部ノ宝方ノ娘小宰相局ト申シケルガ
通盛ヲリよりく文うらなんとおくれるまゝ女院その名をこ
こそろじ捨し小宰相局のまゝなりかなりて返しこそをよこしおくりけり
照たのみ西谷川の丸木橋ぬるこうしてこおくるなりしそ
ゝそのゝ下になりけて丸木橋こゝろにて後ぞくやしこりけり

源平盛衰記抄

大政大臣平清盛ハ桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九
代後胤讃岐守正盛孫刑部卿忠盛ノ嫡男ナリ此親王ノ孫高望
王ノ時寛平元年五月十二日ニ始テ平ノ姓ヲ賜テ上総助ニ成玉ヒシヨリ
已来忽ニ王氏ヲ出テ人臣ニ列ル其子鎮守府将軍良望後ニ常陸
大丞國香ト改ム國香ヨリ貞盛経衡正度正衡正盛ニ至ルニテ六代ハ
諸國ノ受領タリトイヘ氏イマタ殿上ノ仙籍ヲバ許セレズ○忠盛七人ノ
男子アリ嫡男清盛二経盛三教盛四家盛五男頼盛六忠重七忠度
女子有五人○唐土ノ八葉大臣禾ル童ヲ多ク揃ロテ金帰鳥ト云トリヲ
モタセテ國ニ巻ニ彼徊サセテ萬民ノ愁歎ヲ天聴ニ奏セシム○清盛
丹威徳明王若年ノ時阿闍梨祐真ノ教ニテ大威徳明王ノ法ヲ行ヒ七箇年
ニ満ル夜明王示現アリテ勅免んとおもふこころのきよりハ花の

咲はき第も第ん　卜占告り○権中納言成範卿　千早振神もわくなる色いろ花もよわしとめてよりくるうれ○徳大寺左大臣公能ノ娘ハ先帝近衛院ノ后ニテ中宮ヨリ大皇太后ニ昇ラセ玉ヒケんが主上七代二條院ノ御時ニ落玉ヒテ又再ビ入内シ玉フコノ例嘉ヂナノ唐土ニテハ唐則天皇后ハ大宗高宗ノ両帝ノ后ニタチ玉フカノ公能ノ娘再ビ入内シテ陰ヲニ近衛院ヲ加ヘます事ハ遠山霞ノ月ヨ。せ玉フ画ヨミテ吉レヲヲモイデヽ　おもひまつ四うき名をもナキ世ニ井の月をうんとや○二条院ハ体重なるうへみめくもまして四一重ニ天皇ノ尊号ヲ五条二十五世玉ハヾイニダ内ヲ退ケ奉リ法名無寄さしも流罪せられ玉フこと十二月延喜

ノ聖主安和ノ御ガンノ法ノ僻事トコソ申し傳へ侍れ上古ナヲナカリシ如シイワンヤ末代ヲヤトテ諫言こそん○後日ヲタノ○未代おとろきうきナキ世ニシワリテ胡玉かアルバコソ恨モアレ○知盛ハ清盛ノ三男ナリ○愛法師一平安城七道ノ入口ノ辻ゴトニ六體ノ地蔵菩薩ヲ作り奉り卒都婆ヲ立三道場ヲイトナミテ菩薩ノ尊像ヲ安置し奉り七箇所ニ一体ヅヽコレヲ四地蔵トヲ云木幡里六地蔵四宮河原山科里菩薩池柳枝西阪本今詳ナラス蓮臺野千本北西七條里桂造道鳥羽村今ニ地蔵三ワリトテ毎家盆書七月廿四日ニハ老若群集スリ○三世ノ諸佛解脱幢相ノ法衣○四恩一天地ノ恩二國土ノ恩三父母ノ恩四衆生ノ恩観音三見エタリトゾ○再ビ寅本ハ其倒根必傷○ヘラズ顔○餘命○孝ヲ矢ニテハ○アラヌ拠舞○孝ヲ矢ニテハ○空耳トテ○お懲○掾行道○急状申サレケリ○イトヾ百ノ婚ヲメニシテル○治承元年六月二日新大納言成親卿左遷ノ仰ヲ追タテノ使人来リ禁ノ楷ヲトテ三杖アテル次ニ看督ノ長殺害ノ体トテ二刀ツヽ

三ヨヲシテ東ニサセテユキシトゾ ○上ハ梵天帝釋下ハ堅牢地祇 ○行ニ百行ア
リ國士ヲ治ル謀ナリ善ニ萬善アリ生死ノ出ル勤ナリ卒都婆ハ萬善ノ隨一ナリ諸
佛コレヲ歡喜シ孝養ハ百行ノ最長ナリ乾天必哀愍ス ○破 ○安德帝降誕ノ
前ニ二位殿一条戻橋ニ車ヲヤラセテ橋トヲキ玉フ其時帝五歳計ノ禿ノ童十二人
雪ヨリ東ニ向テ走リケルガ手ヲタヽキ同音ニ拍ハ何ノ拍ゾ國王ノシヅハ一里ノ汐路ノ
波ノ寄拍ト四五返ウタウテ飛カヽルクニウセニケリ 抑一條戻橋ト云ハ昔安部晴
明ガ天文ノ淵源ヲ極テ十二神將ヲヲノ橋ノ下ニ兄レヲイテコレヲ占ヒヲシル十二人ノ童ハ十
二神將ノ化現ナルベシ又三善清行 死セルヲ子ノ浄藏貴僧父ヲ蘇生ス浄藏ハ
ヲ出テ入浴シ此橋ヲスグルニ早父ノ喪送ニ遇フ棺ヲ停テ橋上ニ置肝胆ヲ摧キ念誦ヲ
揉テ大小ノ神祇ヲイノリ遂ニ悲カリ陀羅尼ノ德ニヨツテ焔羅王界ニ徹シ父ノ清行忽
チ蘇生ス浄藏涙ヲ流シテ父ヲ抱キ家ニ歸ル ○コヽヲ名附テ世人戻橋ト云ヒ洛陽ノ名橋ト
ス ○阿遮一眼ノ鬼神ノ窓ノ前ニ現ジ玉フ多歳三鬼ノ床ノ上ニ魔軍
ヲ驅ヲ拂テ去ル ○後白河法皇建禮門院ノ法華ノ誦ニシニヨリテ女人除疑生産
時邪魔癒障苦難忍至心称諦大悲忽ニ
急速サラヾト神擁セシニ世ニ生玉ヒケリ ○細木ノ鵤尻ニ佩玉ヒテ金錢九十九文
ヲ枕ノ上ニヲキテ天ヲヌステヽ父ヽトシ地ヲモツテ母トスト祈リ奉ラレケリ即チ臍ノ緒ヲ切
奉テ圍碁ノ二錢出サレタリ 歸後淨勒負佐是
○周章 ○康頼入道 双林寺ニ昔山荘有ケルニ落着玉ヲ見玉ヒ兄弟ヲ
キタリシ下部モナノ産ニ千草生茂リ軒ノ忍ブコヒノニニ荒ル宿ナレドモ
人モナノ叓屋ノ苔ムシテ月ノ光モ漏サリケレバ ぬるさとの秋をよこゝみ
ゝて思ゝよるもそゞろ哀ケルトゾ ○恐歎大カナラズ ○漢高祖ハ三尺ノ劔ヲ提テ天下ヲ治メ玉ヒ准南ノ
黥布ヲ討シ時流矢ニアタルヲ疵ヲヲ蒙リ命ヲキロボサントせし時諸臣名医ヲムカヘテ
コレヲ見スル醫師ノ云百斤ノ金ヲ賜テ此疵ヲ癒ヤサヾヤト申ス高祖宣ハ我項羽ト合
戰スルコト八ケ年ニ七十五度ニヲイテ勝利ヲ得天下ヲヲサメ今ノ

此ノ咎ヲ蒙ムル事ハ天ノ與ウルナリ天ノ心ヲ不知シテ療治ヲ加フトイヘドモ何ノ益アラン但シカリイヘドモ金ヲ惜ムニ似タリ与ヘテ五百斤ノ金ヲ醫師ニ賜リケレバ療治ヲ与ヘケズシテ終ニ薨シ給ヘリ○心ニ思ヲ懐ヒ胸ニ恙ヲ存ス○按スルニ宋國高王山一小松大臣 黄金ヲ以テセシテ説ク多シ平家物語ニハ三千五百兩トアリ井沢長秀ノ俗説輙ク信ズル事ナカレ大臣病床ニカリシトキ日本ノ恥ヲ鑑テ異國ノ醫師ニサヘ療養ヲ受ズ平家ノ運命短キヲ覺シテ宋國ニ我後ノ菩提ヲ頼ンヤコレ等ノ一日本ノ奢ニアラズヤ推ラルベシ○レトカシタリ○恫 朝 ○再ニ肝ニ銘ス○葬如 ○蒿蹊 水鳥馴舟ト云ヒシ舟人ノ心ヲ忘ルベカラズ○てさくに稼よ力をくるもの堂ばそのゑ○眉ニ八字ノ霜ヲ生ジ○詹海ノ如面ニ皺ミテ○春ハ花ノ下ニテ傾ク日陰ヲ歎キクラシ秋ノ月ノ蘿ニ行ラヲ怨ミ○栄花 身ニ積悪年久シ○如 僕ノゴトシ○サナイわせリ○冥助○究竟ノ手足○矢面○射向○頭頂○目ヲスニシテ見トレイル○淨三信敦政 軍立ハ七十余騎何中ニおし落テ侘ツ仮ツ阿おしたんぞ三テ宇治川

橋下ニ居ヌレハ堪ガタシ況ヤ冥途三途川ニコソヲモイヤラレテ おすひ生 くり
晴後のミ涙川 ほくの志ゝ涙 ○伊賀武志 縫
織の澁きて字治の細代 ゑうの
リノ水サレリトイヘルニテ 山ー涙
ホー河 波やゝゝ華 ○三密瑜伽ノ道場モ ナケレバ梵鈴ノ声モ断テ一
夏安居ノ佛堂モアラザレバ僧 善ノ華モタヽリ ○三井寺 ○園城寺氏云
ノ三帝ノ御産湯ノ水ヲ汲タリシユヘニ三井寺トハ名ノケタリ又大師 此所ヲ傳法灌
頂ノ霊地トシテ井花ノ水ヲ汲ム慈尊ノ朝 三會ノ暁ヲ待ユヘニ三井寺ト申トカヤ
○三井寺 燒テ後 行尊 新古今
あすおがむ ゑ 歎 華 ○
うまでとむらふ 言 ○ 哥林 ○ 新都行幸ノ供奉ニ参ル人ノ
旧都ノ柱ニかきつけ 留 ○ 名ノ里ニ
果ん 行幸 ニテ ニアラザレ王ヒケルニ何者ノ魚ぞ ノ道似ニ

札タテケリ　咲てく花の都を立出て凡ゆくしるの末そ行や
うき　○祇王祇女「蓬莱山には千歳ふる万歳千秋重なり松の枝には
露と出し巌のまとは亀ぞすむ　○佛御前「君を始て
みるときは千代もへぬべし姫小松御前の池なる亀岡に鶴こそむれゐて
あそぶなれ　又「よしやさらばこころのまゝに流してまさるゝき
ハ人の心なりけり　○情ヲ柳髪の色ニ染レバ春ノ思ヒ乱レヤスク心ヲ蘭質
ノ年ニ移セバ秋ノ雨露脆シ孤ノ黛花ノ姿テ　○祇王　萌出るも枯るも
同じ野辺の草いづれか秋にあはではつべき

○早可追討清盛法師并一類事
右君子不直人者令民成愁奸臣在于朝者賢者不進彼一類者害非忽緒朝家
失神威興佛法既為佛神之怨敵亦為王法之朝敵仍仰前右兵衛權佐源頼朝
臣宜令追討彼輩早退怨敵可凌宸襟矣依院宣執達如件
治承四年七月五日　散位光能奉
謹上　前右兵衛權佐殿

○聞性房阿闍梨撿八貝ヲ　○鹿ニ云処ノ狸　○公藤外ニ切腹引、禁荊保喩ヲ　○興福寺ハコレ淡海公ノ御願藤原累代ノ氏寺ナリ
初ハ大織冠山城國山階ニ営給ヒ山階寺ト名ツケラレシヲ天武帝ノ御時大和國
高市郡ニ移サレ元明帝ノ御宇ニ添上郡春日ノ地ニ移サレテ興福寺ト名ツク
法相大乗ノ教ヲ弘通セリ代ヽ國母ノ御願篤シ東大寺ト申ハ良辨僧正懇篤
ノ祈誓アリ聖武天皇此僧正ヲ帰依シ給ヒ行基菩薩ニ勅アリテ伊勢大神宮
祈誓シ給ヒケレバ御託宣ニ実相真如ノ日輪ハ生死長夜ノ闇ヲ照シ本有常住ノ
月輪ハ無明煩悩ノ雲ヲ掃フ我難遇ノ大願ニ遇フ聖皇大佛殿ヲ建立ア
ト宣フ行基大士歡喜ノ涙ニ咽ビ此由ヲ奏シ玉ヒシカバ叡信イヨヽ深ク渇
仰ニスヽミテ遂ニ大佛殿ヲ営建シ玉ヒケリ　○そ掛局　おぼつかなた
か杣山の人ぞとよ此くれにひく主をしらばや　忠盛返し
雲井よりたゞもりきたる月なれば　おぼろけにてはいはじとぞおもふ
○熊野山證誠殿ノ戸をおし開きて忠盛へ御託宣トシテシリテ

夜泣まして忠盛たてよみどりまつ清くさのみこともこそ
うまし ○忠盛 這様いいそうめでのなも成るけれ 白河院 忠盛
とまてやしくなしなせよ ○忠盛備前守ニテ國ヲ都へぶりケルニ院ヲ
御使アリテ明石の浦をイカニト法名アリケレバ法道ヲ
明石の浦風 法名のまてよ法名を見へしこの 法威のつまて金
葉集ニイレラレタリ ○經正 [illegible] 上玄石上伝琵琶ノ秘曲ヲ深ク[illegible]白狐尾上ニイデヤタリテ経正ノ方ヲ[illegible]
[illegible] ○帰命頂禮八幡大菩薩日域朝廷之本
主累世明君之曩祖為守宝祚為利蒼生改三身之金容開三所之權扉
爰累年之間有平相國恣管領四海悩乱萬民猥蔑萬乗焚諸寺已是佛
法之讎王法之敵也義仲苟生弓馬之家僅継箕裘之塵見聞彼暴悪不能
顧思慮任運於天道投身於國家試起義兵欲退凶器闘戰雖合兩家之陣士
卒未得一塵之勇之處今於一陣上旌之戰場忽拜三所和光之社壇機感之純熟
已明凶徒之誅戮無疑矣降歡喜之涙銘渇仰於膽就中曽祖父前陸奥守義家

朝臣寄附身於宗廟氏族自號名於八幡太郎以降為其門葉者無不帰敬矣
義仲為其後胤傾頭年久今起此大功喩如嬰兒以蝮量巨海蟷螂取斧向奔車
然間為君為國起之為身為私不起志之至神鑒在暗憑哉悦哉伏願冥慮加
威霊神合力勝決一時怨退四方然則丹祈相叶冥慮幽賢可成加護者先令見一
之瑞相給仍祈誓如件

寿永二年五月十日　　源義仲敬白

コノ文ハ覺明ツクリテ案ニモヲヨバズニ書ス ○憑む木ノ本ニ雨フルココナ ○忠度
故入道大相國ノ墓所ニ秀花ヲ奠ケル時 [illegible]
たをまゐる袖のしをまゐるこの花 ○頼朝卿工征夷大将軍ノ宣旨ヲ下サル其状云

左辨官下　五畿内　東海　東仙　北陸　山陰
山陽　南海　西海　已上　諸國

早頼朝朝臣可令為征夷大将軍事
使　左史生中原康定
右史生中原景家

右左大臣藤原朝臣兼實宣奉勅従四位下行前右兵衛権佐源頼朝朝臣可令為

征夷大将軍者宜令承知依レ宣行之

寿永二年八月日　左大史小槻宿祢奉

左大辨藤原朝臣　在判トゾ書下セケル

○義仲始メツキゾノ嶺嶽門ニカケタリケルガ何者ノ所為ニカ嶽門ノ木ノ下ニ札ヲカキテ立テタリケリ　信濃なる木曽の御料の菁麦は討てだて一字かるゝ義仲○梶原平三景時嫡子景季ハ生食ノ先駈ヲ生食ニアリニ先ヲ駈ヤウトテスムヲ父平三便書ヲタテ後陣ノワハカザラシニ先鋒タランスルモノニハ御賞アルニジキヨシ大将軍ヨリノ仰セゾト云送リケレバ平次背ノ皆ノトテ　武士のとりつたえたる梓弓引ては人のかへすものかは○馬ニ乗ハ一ツ心ニツ手綱三ツ鞭四ツ鐙○護田ノ鳥モノ矢負○肝モ心モ身ニソワズ途ヲウシナイテサカギツクタルカノアリサニハ亀ノ陸ニテガリ宿ノ鳥ノ枝ヲ諍ニ思ヒナラズ○薩摩守忠度○忠度旅宿花　行くれて木の下かげを宿とせば花やこよひのあるじならまし○一首ナレ○菓ノ立所モメヅラカナ○一声称念罪皆除○頓教一乗ノ教○行住坐臥ヲ嫌ワザレバ四儀ノ称念ニワヅライナシ時所諸縁ヲ論セズ散乱ノ衆生ニ便アリ○法然上人ハ原ハ美作國ノ人ナリ○粟籠○道俗緇素○皇慶華厳ノ念撥音氣高○燈暗数行虞氏涙夜深四面楚歌声○衍譲○横笛ニ恋セラカヽリケルヨレキコヘケレバ斎藤滝口時頼　そるまでハうらみしかども梓弓まことの道に入ぞうれしき　横笛返事ニ　そるとてもなにかうらみん梓弓ひきとゞむべきこゝろならねば○維盛ハ後世熊野ニテ杉原本郷小松堂讃岐ナリトゾ○馬ノ烏頭算肥曽帯○那須与市扇ノ的ヲ射シ美名大公望ガ六韜ニイエル雷皐ガ勢チラシガ○定ノ矢○懸鳥的○鷹觜鏑ヲ及凡弓居矮二十一○宿猫白馬○褐湿巻ノ坐三示○与市眼ヲ閉テ南無八幡別シテハ我國ノ神明日光権現宇都宮那須湯泉大明神○祈念○與市鏑ヲ取テツガイヨツ引ヒヤウド放ツ小兵トハ云ナガラ十二束三ブセ弓ハ強シ鏑ハ浦響キ長鳴シテアヤニタズ扇ノ要際一寸計ニ於テヒイフツトゾ射切タル鏑ハ海ヘ入ケレバ扇ハ空ヘゾアガリケル○鏑○伊勢三良ガ良等矢

胡小橋太ハ水練ノ達者ナルハ平家ノ兵大力ノ鞆六良ヲ海底ヘ引入レ首ヲトル
頼朝公ヨリ恩賞トシテ一千石ヲ賜フ○弓手馬手○迦〻○無手○郎等○
先帝ハ八ニゾナラセ玉ヒケル此年ノ程ヨリハ示ラセ玉ヒテ此鬢アテヤカニウツクシク
御髪黒フサヤカニシテ○今ぞしるみもすそ川のながれにハ波の底にも
都ありとは○氷雨○茨海公ノ面向不背ノ玉○桟敷○義経ノ本
妻河越太郎重頼ノ女○熱田大明神ハ景行天皇御宇ニ迹ヲたれ和光ノ
影ニテ垂玉フ○池田ノ宿ノ長清家ノ侍従トイエル遊君　東路のはての
ちやのいのちをきみなくていかで逢見くるらん　宗盛　なくも逢しくも尚
旅のそらに君もつる覚すこと形ノ様ハ　侍従ノ母湯谷　ふるとも子恋ひ
今ておもほゆし東路みたり　さるも木枝ゝ　とまこて清宗へおくられ
思ハ旅路でおもきまじりもハ宗盛　東路おこそひたちをる旅
衣なきるみ袖もかくくはてなき清宗　こと世をしころはく
しの旅衣東路半袖ハ恐ろさし○屠所ノ羊ノ歩行小水ノ魚ノ

金○北方重衡ニ脱カヘ玉フトテ北方小袖ニツ白帷子取具シテ奉リケレバ
「ぬきかふる衣も今ハなにかせんけふをかぎりのかたみと思へバ」
北ノ方モナク〳〵「たのまれあハく契ハくちぬあとにこそ後の世までもわすれ
べきかハ○建礼門院ハ洛東吉田ニ御餝下サセ玉ヒ吉田モ都近クテ物ウシ
トテ大原ノ奥ニ寂光院ト云所ヘイラセ玉フ○静ハ磯禅師ノ娘○二ノ舞○
恥ヒヤカ○平大納言時忠ノ娘義経ノ妻トナリケルガアニリニヒサシクヲトワレナ
バはるかなるハ我のるともみさもかはりてあるとうき人の恋しくのるらん
○行末越方○湯母王新古今よしのなるなつこの河おくハもてる暇ぞ
あくなる山陰よしして○忠肝義膽○維盛和州ニヱテ大峯山上ニ登
リ三重滝ニ臨メバ石丈ノ滝ナ根ノ垢ヲアライ千草嶽ニ登レバ四季ノ花一時
ニ開ケテ盛ナリ吹雪岸ニハ寒嵐衣ヲ徹シ古家ノ宿ハ時雨ニ袖ヲ濡ス大
禅中禅師居凡ノ嶋道釈迦嶽夏虫行者帰リ○キヽ耳タテル○蝦夷
ハ郵信ト謙卑地理風流ニシテ種々ノ産物アリ北海ヨリ東室韋ヲロシヤ

リウスラントコレヲ莫斯未亜達靼ト称ス蒙古哈密コレイニシエノ伊吉廬
ノ地唐ノ伊州ナリ又兀良蛤ノ類ハ大清ニ属スコレヲ支那達靼ト称スルナリ
ヲロシヤ蝦夷人コレヲ呼テアカ人ト云満州カラフト和俗コレヲ称シテミナ
奥蝦夷ト云○後白河法皇建礼門院ノワタラセ玉フ大原寿光院ヱ入御アリ
テ詠ジ玉フ池水ヲ岸の青柳散しきて浪の花てそさかり成
けまし○女院かくまもなき墨染の袖うれさいさらちよの袖の
志つくか○ゆひきや深山のつまをまもりしてやゝ井の角とよみ
ゑんとは